http://www.keiji.tenmonkan.com/index_b.htm

ぼくの中国ひとり旅より　　２０１４年９月２０日

昨年,登った泰山で五岳のうちの四岳を登った。残るは北岳恒山だけである。
でもよく調べてみると恒山（２０１７ｍ）への登山はマイナーなようで、泰山や華山のような人気ルートはないという。
大同市の南東,**恒山風景名勝区**の崖の上に張り付くように建っている有名な仏教寺院・**懸空寺**こそが恒山の中腹にあるので、そこに行くことで五岳を踏破したことにしようと思う。
また、今回訪ねる**雲崗石窟**で中国三大石窟（他は敦煌の莫高窟、洛陽の龍門石窟）もクリアする。**五台山**は中国仏教四大（山）聖地の１つに数えられている。
四川の蛾眉山、寧波の普陀山、は既に訪れたのでここを訪れるとあとは浙江省の九華山を残すだけである。
実は、今年の旅のコースは現地に行ってから変えてしまったのである。
当初、五台山のあとは、そのまま南下して太原に行き、その後、世界遺産『平遥』を2日ほど、のんびり歩き回ろうと考えていた。できれば折角だから黄河の「虎口瀑布」には行けないだろうか、とＨＰをあさって見たりした。
変わったのは旅も半分が過ぎた頃だった。草原を馬で駆け、砂漠を駱駝で徘徊し、山上の寺を見て回っているうち、知人が日本語教師を務める福建の海岸地アモイのコロンス島が大きく目の前に広がってきた。
それに包頭から乗った大同行の硬寝台車の中で横に座った男の人が話しの中で『平遥』はつまらない所だ、と言ったのも影響した。
「大石さん、こちらは暑い夏ですよ、Ｔシャツで毎晩歩いてるよ。」と携帯電話の向うから上山先生数回のラブコール。（に聞こえる。）
よし、平遥はやめて北京に戻ってアモイに飛ぼう。近くには、いつかテレビで見た土楼「**客家**」の里があるはず、一日ツアーで行けるかも知れない。
そんな訳で、中国を北南へ駆ける１４日間の旅が決まったのである。
終ってみれば今回もいろいろ思い出多い旅だった。
話を戻せば何故、内蒙古からスタートしたのかもいろいろ試行錯誤があったのである。山西省が第一目的だったことは先に書いた。
大同へまず行くアクセスを調べると上海から大同へは現在飛行機は飛ばないらしい。
大同空港が改装中と、最新版の「地球の歩き方」に書いてある。そうすると、まず　上海から北京へ飛ばなければならない。
北京から大同へは汽車で６時間とある。長途バスもあるとはいうが６時間というのは実に無駄な時間なのである。夜行を使うと夜中に着いてしまう。昼間行くと１日が無駄になる。
どうせ大同に飛べないなら、何も北京に寄らずにフフホトまで上海から飛んでそれから南下するというのはどうだろう。
早速、内蒙古出身の留学生・丁雪輝さんにいろいろ聞いてみた。同時に、地球の歩き方』や、インターネットでフフホトを検索、いろいろな方の旅行記を読んでみた。
最大の目玉、「草原ツアー」の催行期限が９月上旬と書いてあった。調べるうちにこれは雲崗石窟や**懸空寺**より内モンゴルの方が面白い。ということになり旅のメインが変わってしまった。草原を駆けるわが姿を思い浮かべていた。
内モンゴル第二の都市「包頭」も調べてみるととても魅力的な都市だった。
僕の好きな「黄河」の最北端が見られる。それに、砂漠もあれば、ジンギスカンの陵もあるという。ここにも行って見たくなった。
『何にも無いですよ～』という留学生の丁さんに、しつこく質問することが多くなった。
「大石さん、本当に行きたければ、包頭はわたしの故郷ですよ。たくさんの友人や親戚の叔父さんも居ます。車で　案内してくれますよ。遠慮しないでいいですから。」　と何度も言ってくれた。
ぼくは、旅は未知の人の世話をなるべく受けたくない、スケジュールを拘束されない、を中国の旅では特に信条にしている。
と言うのは中国の交通機関は本当に何時に、どこどこでと決めたら８０％が心臓を悪くする結果が待っているからである。

また、中国人の応対（接待）は生半可ではない。徹底的に面倒をみてくれるのが多いことを経験している。

それは、とてもありがたいこと。実際、その間かかる経費まで全部、払ってくれる。至れり尽くせりである。・・がしかし、「身をゆだねる旅」になる贅沢な不満が残ることがある。

《時の流れに身をまかせ》るのはたまには悪くはないが、《人に身を任す》のは男だからあまり好きではない。

ぼくはそのことを丁さんにも言った。

「大石さんの言うこと、よく分かります。心配しないでください。」

いろいろあったが結局、フフホト2日、包頭2日のスケジュールがきまった。、包頭での滞在中は丁さんの叔父さんの世話する車を使わせてもらうことにした。

こうして旅の上期（４日間）の詳細な計画がたった。中期は大同・雲崗石窟と　懸空寺、それに文殊菩薩の五台山である。

ここの旅では医学留学生の王宇清さんのアドバイス「大石さん、仏像やお寺を見学する時は日本語ガイドを頼んだほうが良いと思います。」「そうしないと案内書と見比べながらの面倒な見学になりますね。」

彼女のコトバに、はっとした。

そういえばここ何年かのひとり旅では運転手か、頼んだ中国旅行社の中国語ガイドの殆んど肝心なところは理解できない説明に　「明白了」「是マ?」「好的」「真的マ?」と言って合いの手は打っても、何にも不明白了だったのだ。

要は一人でガイドを付けるなんて勿体ない。とけちっていたのである。　２００元が相場らしいので今回は初めからそのつもりでいた。（成功した。）

かくして、**9月6日（水）快晴の朝**、ぼくは準備万端整えて、妻の通代と一緒に鹿児島空港へむかった。朝のニュースでは今朝、紀子様が男児をご出産された。と報じていた。　そういえば、昨年,発つときは小泉首相の靖国参拝のニュースだったっけ。

東方航空カウンターでフフホト便の変更チケットを受け取り上海へ向かった。

しかし出発時間が変更になったこの上海航空のフフホト便は翌日トラブルを起こし結局は飛び立たなかったのだ。

最初の計画では7日朝、7時15分発のMU便を購入していた。これだと、フフホト着がお昼頃になりネットで予約していたホテルにある「中国旅行社カウンター」で翌日の「草原ツアー」の予約が出来るつもりだった。

そのあと、郊外にある「昭君墓」は無理でもフフホト市内の観光地「大召」や「席力図召」「博物館の恐竜見学」また、夕方の市内ぶらぶらなど可能だろうとプランを立てていたのだ。

ドキュメント「何故、飛ばない?」

上海発　呼和浩特ゆき　　５：４５発　８：００着（予定）

BOMBARDIER CRJ-200（４６人乗り１２列　片側２人掛け）

５：４０　フフホト行　手続き開始。バスに乗って着いた、目の前の飛行機を見てビックリ。おもちゃのように小さなボロ飛行機である。機体が汚れている。

一応、４８席はあるにはあるがシートも狭ければ、通路も極めて狭い。年配の女服務員が行ったり来たりせわしない。　何だか、墜落しそうな予感が飛行機を利用して以来４０数年、初めて感じた。蒙古の砂漠の砂に消える。今から旅の始まりだというのに冗談じゃない。

そういえば、さっき待合室にいるとき、アモイの上山氏と中国の飛行機事情について語り合ったばかりだ。

６：２５分（機内に３０分ほど居たことになる）、ぼくは今,飛んでいる機内にいるのではなく、搭乗手続きを待つ虹橋空港の待合室に座っている。そして、ひまなので、この顛末（まだ進行中）をメモしている。

実は私たちは**回来?**。　　つまり、空港に戻ってきたのである。

飛行機はエンジン音高らかに正に離陸寸前から又音が小さくなりオーバーラン寸前で止まってしまった。

「なんじゃ、どしたんじゃ！」

「飛び上がったら墜落しとったんじゃねーか！」

『早く、もとに戻って別なのを飛ばせ！」

とまあ、そんなことでも叫んでいるのだろう。年増の空中小姐（スチュワデスのこと）と乗客の間で喧嘩が始まった。

内容が分からないので、帰ってから田くんに訳してもらおうと、ポケットに入れておいたICレコーダーの録音スイッチを入れた。（帰ってから聞いたら雑音で聞き取れなかった。）

機長の説明がスピーカーから流れると急に皆が静かになった。

最初の搭乗待合室に戻ったのが**6時25分**、それから　われわれには2つの選択があった。1つは、やがて修理が終る筈のCRJ－200でフフホトに飛び立つか、あるいは次の定時便9：45分まで待つかを決めてくれ、と言う。

ぼくはホテルのことが気になったけど、あの飛行機には乗りたくないので後便を選ぶことにした。

説明する担当会社の服務員の言葉がさっぱり分からなかった。横にいた親切そうな女性に要点だけを逃さないよう質問し、答えを聞きいった。まあ、大筋は上のような感じだった。

赤いカードを貰って、幸い、その女の人も後発を選んだようで、一緒に最初の搭乗手続き以前に逆戻りした。

良く分からないが荷物検査やパスポート検査以前の状態へである。

親切女が僕を手招く、弁当の配布だと言う。

余り食べたくない、鶏のごてとかぼちゃの煮付けに漬物、あとちいさなりんごが2つ。

いろいろあって今、**午後8時**（最初の故障機から3時間が過ぎていた。）

ボーイング737に最初に乗った全員が乗っている。われわれが乗った時はもう前のメンバー（修理待ち）は既に乗っていた。左右に三人づつ6席が30列ある180人乗りの大型機である。　あの「命拾い機」とは雲泥の差だ。

8：10　エンjンの音が上った。「今度はお願いします737さま」

8：14　大丈夫、空の上です。

上海航空と東方航空が協力して特別機を出したのだろうか。

そういえばぼくが最初に買ったチケットではMU5651K　7：15発だったけど

変更後の夕方発の便は何航空かよく見なかった。

まあそういうことはどうでもいいけど気になるのは、このままいけばフフホト着は間違いなく11時は過ぎているだろう。

このことはかなり心配なことなのだ。

機内放送によると、フフホトの気温はひとけたの4℃という。

格好をつけてぼくの服装はTシャツだ。

それでは最初の訪問地フフホトへ御案内しましょう

フフホトは内蒙古自治区の首府である。人口213万人。

モンゴル語で「青い城」と言う意味である。内蒙古にはホトという語句の地名が多い。ホトとはモンゴル語で〈港〉という意味だと金トンさんに聞いた。トルコ近辺の西域には・・後ろにスタン（アフガニスタン）という語句がついた地名が多いのと同じである。

市内には20万もの蒙古人が住んでいるという。16世紀の中頃、明の万暦帝のとき、建設された。　1915年にモンゴル・ロシア・中国との間で交わされたキャフタ条約で、内モンゴルと外モンゴルに分割。

日中戦争時は、日本が内モンゴルの一部を支配した。　市内の看板にはモンゴル文字が併記されている。

ウルムチやトルファンの看板にウイグル文字が併記されているのと同じである。

ここは元は別の国だったのか、と思い知らされる光景である。

この美しい草原の日の出はシラムレンで偶然知合った旅人

京都から来ていた佐藤くんからの提供。僕は寒くて泊らなかったが、今思えば自分で撮りたかった。

●はじめての内モンゴル

ポツポツと街の灯かりが視界に入ってきた。時計の針は10時をとっくに回っていた。

まもなく着陸だろう。機内は真っ暗で何も見えない。高度が下がっているのは身

体へかかる気圧の具合で分かるのだが乗客は皆静かで、着陸前のいつもの雰囲気は見られない。

と突然、目の中にキラキラ光るものが見え始めた、と思ったら雨に濡れた滑走路が目の前に迫っていた。

「ガクン！」という音と共に機は着地した。アナウンスは勿論、ベルト着用のサインも付かなかった（見逃したのかも知れない）

上海航空７３７機は、フフホト白塔空港へ無事に着陸した。現在時刻は午後１０時２８分

２時間１０分の飛行時間ということになる。（感想・・・やれやれ。である）

いまいちばん心配なことはホテルに、何時に着くか、と言うことだった。

最初の計画ではリムジンバスに乗るつもりでいた。　今回の旅はいかにタクシーを利用しないようにするか、ということだった。

『地球の歩き方』によると、市中心部までの距離は１５ｋ、エアポートバスで４０分、料金は5元とあった。ちなみにタクシー代は３０元と書いてあった。

荷物を受け取り、外に出るまでの時間を早く見ても３０分とすれば１１時にタクシーに乗っても１１時３０分にホテル着ということになる。

（ホテルに電話をしなくて大丈夫だろうか？）　いろいろな雑念が頭をよぎる（我累了）

もう１５分も待っているのに荷物の乗るはずのターンベルトは動く気配すら無い。

「やはり機内持ち込みをするんだった。」その為にわざわざ小さなスーツケースを娘に借りてきたのだったのに。と又、**小さな後悔**。

中国旅行に「後悔」はつきもののようだ（読んでくれている中国人朋友へ　真対不起）　ぼく個人の問題なので誤解しないように。

今回も３つの**大きな後悔**をしてしまった。今、書いてしまうと面白くないのでその都度、書くことにする。

スーツケースの中からたった一枚だけ持ってきていた長袖トレーナーを引っぱり出し、Ｔシャツの上からはおる。

、空港ターミナルを出た。この瞬間の凍えるような寒さ（冷たさ）を文章でどう表現していいのだろうか。

出発前日に丁さんから電話があった。

「フフホトはとても寒いですよ。明日は最低気温が４℃だって金トンさんから電話が来たよ。ぜったいセーターか防寒衣必要と思います。」

「我慢、我慢、そこだけのためにそんなのスーツケースに入らないよ。」

「だったら、中国で買ったらどうですか、安いでしょう。」

そんな会話がよぎったが、あの時は寒さに対する感覚が麻痺していた。又、**小さな後悔**。

目をすぼめながらあたりを見回すけど、バスらしき姿はその辺には見当らない。

よく見ると５０ｍぐらい先にタクシーが並んでいるのが見えた。

そして、かけて行く乗客たちの姿が目に入った。

『まずい、乗り損なったら大変なことになる。」焦りが走った。

冷静に考えたら中国で乗客がいるのにタクシーが無いということはラッシュ時の上海、北京ならいざしらず、ありえないことだ。

多分、順番通りなのか？女のドライバーが待っていた。

「もう連絡バスはいません。遅いから帰ってしまったよ。」

そう聞いてやっと分かった。乗ってきた７３７は故障機の代替機ではなく、要は予定とおりの最終便だったのだ。そういえば乗るとき、機内には結構たくさんの乗客が座っていた。

言葉が分からないと、細かい事情は想像の域を出ないということである。

深夜だから５０元だという。他のタクシーも申し合わせだから一緒だ、と（司机）は言う。

もう、交渉などしている余裕はなかった。「騙されてるかもしれないけど３００円のことで　万一、おいてきぼりにでもなったら大変なことだ。」ぼくは急いでＯＫ！と言い、スーツケースを後部トランクに納めホテルへ向けてスタートした。

「どこから来たのか？台湾人ですか？」と運転手は言う。この時期、台湾からの旅行者が多いのだという。

「昨日から、急に気温が下がったので草原は雪が積もってるかもしれません。」と言う。

「旅行社に任しているけど本当は四子王旗か輝勝錫？が良いと聞いて来たんだけ

ど。」

と言うと、

「この時期はどこも余り草はよくない。多分、シラムレンあたりがかえって綺麗かも知れません。この頃はたいていのツアーがシラムレンだと聞いてます。」との返事。

「あなたがもし希望のところに行きたかったら、アタシが連れて行ってもよい。」と言う。

・・・誰もいない草原にひとりで馬に乗り、パオに震えながら泊る様子が目に浮かんだ。

「もう予約済みだから、いいよ。」と答えた。

夜の道路は殆んど他に車はなく、なんと20分そこそこで「昭君大酒店」に着いた。

11時30分（日本時間の午前0時半）だった。明日の「草原ツアー」の予約を確認して何のこともなくチェックインを済ませ部屋へ。

エアコンの効いた暖かい部屋がうれしかった。 かくして、とてもとても長い（2日目）が終った。明日はいよいよ「草原」が待っている。

ジンギス汗が草原を駆けたあのモンゴル馬で草原を駆けるのだ。

9月8日（金）

朝、6時40分、7時半に呼早（モーニングコール）を頼んでおいたが1時間も早く目が覚めてしまった。実は、又、朝からハプニングが起きてしまったのだ。

二階ホールで朝食を、まさに食べようとしていた時、携帯が鳴った。 この時間なら丁さんか、アモイの上山氏かと思っていたら突然、聞きなれない中国語である。」

てっきり丁さんの紹介してくれた金トンさんかと思った。あとで判ったのだが、今日のツアーの運転手だったのだが。

いつもの習慣で中国ツアーの場合、連絡は最初、女性ガイドから来るものと思っていたのでこれは金トンさんだとばかり早トチリしてしまった。

「あなたは丁さんの友人の金トンさんですか?」

「そうです。」

「私は丁さんの知人で日本から来ました大石ともうします。」

「・・・・・・・・・・」

「今、昭君ホテルで朝食をとっています。あなたは今、どこにおられますか?」

「わたしは今このホテルにいますよ。」

「えっ何ですって！ 昭君ホテルにいるんですか?」

「対了。」

「ぼくは8時半からシラムレンに行くことにしてます。明日、午後には包頭に行きますね」

「9時ですよね。?????出発は?????」

「ご挨拶をしたいので食堂までこられませんか?」

「2階ですね?」

「対ヤ。我等二」 これぼくです。お待ちしています。のつもり。二はあなたの意味です。

かくして、私たちは全然人違いをしたまま、食堂の入口で、すれ違いの会話が数分続いたのです。

そして、お互いの名刺交換で初めて人違いに気づいたのである。

（草原ツアー??有限公司 ・金福星）・・・・名刺にはそう書かれていた。

「あ、不好意思、我弄錯了！」 （スミマセン、人違いでした。）

彼は相変わらずニコニコしていた。

そして、ぼくは朝飯もそこそこに出発準備のため部屋に戻った。

結局、シラムレン行の面包車（マイクロ）に乗ったのはぼくの他は一人の欧米人と二人の東洋人（多分、中国人）の四人だった。あとで、話をしたら、彼は上海に企業派遣されているオランダ人だと言った。（馬に乗っている外人がその人）写真を送ろうと思うけど交歓した名刺が行方不明。

運転手の話だと、シラムレンまでの距離は１７０ｋｍと言う。

市街地を抜けると舗装されていないガタガタ道が続く、空腹の胃が踊っている。道路の脇を見ると、なんと水なしの川底を車は走っていた。

しばらくすると山の中を車は走る。そして又、綺麗な舗装道路があらわれる。車は陰山山脈に入ったのだろうか。

車窓からみえる景色に緑は少ない。日本だと緯度的には紅葉が続いて見える筈、秋の日本の自然のすばらしさをふと思い出す。

このあたりも大昔は原生林だったと聞いている。中国北部の砂漠化のことも頭をよぎる。やがて、この山を越えると、いよいよどこまでも続くあの大草原が待っているのだろうか。

とつぜん運転手兼ガイドの金さんから説明が始まった。

「車が着いたら１つのセレモニーがありますよ。みなさん車を降りたら回りに歌を唄いながらモンゴルの若者たちが待っています。歓迎のお酒を飲ませます。」「まず、左手で杯を受けます。すると、お酒（馬乳酒）をついでくれます。」

右手の人差し指で軽く酒にふれ、その指を自分の胸に当てます。

又、指を少し酒をふれ（つけ）、今度はその指を天に指します。

そしてから、そのお酒を一気に飲み干して終わりです。」

とうぜん、ぼくはよく意味がわからない。要点だけは何となく分かった。

ほどなく車は村の入口に着くと、予定通りの賑やかな儀式は終った。

写真は残念ながら撮りそこなった。というより、ぼくはその時、デジカメを撮影モードに切り替えていたのだ。

歌も入るのならこれは絶対、ムービー設定にして、帰ってから家族に見せよう。と車が到着する前から準備していた。

もし、このＨＰ上で再生出来たらと思って挑戦してみたが難しかった。

とにかく大気は寒い。時折、吹雪のように横殴りに小雪が舞う。まあ、最悪の天候といっていいだろう。

小さな包に連れて行かれるとそこは売店だった。「防寒衣は要らないか?」と言う。もう絶対これを着ないで馬には乗れない。

早速、軍手と一緒に借りた。６０元の借り賃にヤージンが１４０元だという。（１５番目の写真）

さっそく４人のグループで乗馬初挑戦である。

とにかく寒いのだ。（爽快）（のどか）（颯爽）（高揚）などといった初めての草原疾走へのときめきはゼロといっていい状態である。

ぼくにあたった馬はぼく好みの黒褐色。鐙（あぶみ）も銀色でとても気に入った。

チンギス汗とモンゴル馬

さて、ここでモンゴル馬についてちょっと書いてみたい。

十三世紀に現れたチンギス汗は、広大なユーラシア大陸に空前絶後の世界帝国を築いたが、その最大の秘密は、兵器としての馬をモンゴル馬という小型馬にこだわったことである。

チンギス汗は愛馬を持たなかったという。この小さな馬をチンギス汗は兵器とわりきり、疲れた馬は補充の馬につぎつぎに乗り換えていった。

青草しか食べないモンゴル馬と穀物をいっぱい食べている大型馬（サラブレットなど）とではスピードも持久力も大型馬にはかなわない。

モンゴル軍は青草だけで耐える小型馬を一人で数頭つれ、乗っていた馬が疲れれば、補充の馬に乗り換え、疲れた馬を休ませ、その繰り返しで遠征を繰り返したという。

意識的に改良しようとしなかったモンゴル馬は小さいばかりか見栄えもしない。

頭が不格好に大きく,首もふとい。たてがみが多く、尻尾も異様に多く長い。眼が小さくて、耳もみじかく,厚い。もちろん背も低く、足はからだにくらべて太く、スマートさはないし速そうな感じもしない。

おまけに　馬は小さい馬ほど性格的にあつかいにくいところがあるらしい。自己主張が強く、頑固で、気も荒く、人を乗せたがらないのだと。

だが、彼等はたくみに調整して、これらの気性を逆にがまん強く、勇敢な馬に仕立て上げたのである。

チンギス汗の兵士についてマルコポーロは書いている。

「彼等は遠征のとき、雨を防ぐための小さなテント以外、道具は何も持ってゆかない。

食事もとらず、連続十日も騎行する。

そんな時は馬の血だけで飢えをしのぐ。まず血管を切り開き、血を自分の口にほとばしらせ、満腹するまで飲んで、血止めをしておく」

チンギスの率いる軍団が優秀だったのは、ヨーロッパにおいてもっとも進んだ馬といわれるような大きな馬に乗り換えるチャンスが多かったにも関わらず,食指を動かさなかったことである。

また馬種を改良しようとしなかったことである。乗ってみて,味の良さやスピードには感心しただろうが、遊牧には適さず、したがって、長距離の遠征にも適さないと判断したに違いない。

モンゴル軍の成功の秘密は長距離遠征を可能にしたモンゴル馬だったのである。

乗ろうとしている馬は確かにモンゴル馬に違いないが、ロバに乗ろうとしているとは正直、思わなかった。鐙に足をかけ、そのまま馬の背に乗れるぐらいの高さだから小さい馬には違いないのだろうが。

実は馬に乗るのは初めての経験だ。

かって、志布志の馬場で有料の馬に乗ったことがある。でも、轡（くつわ）を係りの人が持って引いて歩く（コースを回る）だけだった。

今日は一人で何時間も乗り回すという。正直のところ、少しドキドキしていた。まさか落ちはしないだろうが。

ＨＰを読むと、そのうちお尻や内股が痛くなり、尻を浮かさないと耐えられなくなると書いてあったのもあった。

さあ、それらのすべてを自分で今から体験するとしょう。

・・・とまあ、そんなことを考えるまもなく、先導馬のモンゴルおじさんが駆け出して行った。

それにつられぼくらの馬も続く。

鞍に付いたまるい金具を両手で持つのか、それとも、とても貧弱な紐の手綱を持つのか、ラクダのときは確か、金具だったと思う。思い出した。去年、済南（jinann）の黄河の横の記念植物公園で馬に乗ったときは手綱しかなかったはず。

四人を乗せた馬はどうやら１つのしつけられた行動をとっているのが段々分かってきた。

先頭を走る馬が必ずしもモンゴルおじさん＜年齢は３０代かも＞とは限らない。

だけど歩く時、駆け足のとき、そしてかなり全力疾走（体感は競馬のレースもどきである）実際、このときは武豊もどきに尻を浮かせ前傾姿勢をとってしまう。もう、帽子も吹っ飛びそうだった。

そして、約１０分以上は全力疾走する。

（ほんとう）この時は、手綱と金具と両方を掴みたくなる。

そして、突然、いっせいに駆け足状態にもどる。これが不思議だったが、やがてわかった。

モンゴルおじさんの唄う歌に馬は反応していたのだ。

道理でへたな歌を大声で唄いながら乗っていると思っていた。

一時間ほど駆けて行くと数本の木が立っているところで馬達は止まった。

５０メートルほど先にきたないトタンの壁板があった。大きな字でＷＣとかいてある。＜写真参照＞

横には包が建っていて休憩が出来るようになっている。蒙古流のお茶とお茶菓子を振舞われる。珍しいので片っ端から味見してみる。（很好吃）

戻りは、他の騎馬集団と合流してしまった。４人で走っていたときとはまた全然気持ちが違う。まさに中原を駆ける曹操軍の気持ちだ。

疾走がはじまると皆が一斉に大声を発する。その言葉が中国語だけに大迫力である。自分も１８００年前の『三国志』の世界にタイムスリップしたかのようだった。

もうこの体感だけでぼくはここに来てよかったと思うことだった。

草原の緑が少ないとか、天気が悪いとか、そんな行楽気分で馬に乗るより、この迫力は何だろう。ほんに数時間でぼくはもうモンゴル馬のベテラン騎手に変わっていた。

包に戻る頃は身体もけっこう温まっていたけど内股やお尻よりぼくの場合は足のすね辺りがとても痛かった。知らずのうちに両足で馬の腹を締め付けていたのかもしれない。

お昼の食事を取るため食堂包（と言うのかどうか?正式名は我不知道）に入る。

そこで京都から来た日本人に会う。もう全く彼が日本人には見えなかった。中国もどこか南方人と言った感じだった。でも、中国語なまりの日本語をしゃべった。

京男がああいう場所で日本語を喋ると中国人がなれない日本語をゆっくり話しているように聞こえた。もっとも彼、佐藤くんは同じイントネーションで中国普通語もしゃべる。

翌日、偶然にも又フフホトの「蒙古博物館」で彼に逢った。

今夜、１１時の北京行硬座で帰るそうだ。「それまでぶらぶらします。」と言う。

「じゃあ、ぼくと一緒に回りませんか?」「ありがたいです。」

というわけで一緒にフフホトを回ることになった。

半日以上、行動を共にしたとき聞いた話によると、彼は中国語の歌を唄うのが得意なそうで（自分で言っていたから本当だろう）。

北京のカラオケで歌ったら、一人の中国人が「おまえさん、今度、北京ＴＶのからおけ大会にでたらいい」と本気で勧められたらしい。

後日、佐藤くんから一緒にフフホト観光地めぐりをした御礼のメールが届いた。

そして、あの日、あの後、かれは寒いシラムレン草原の包に泊った。と、あのあとの報告を告げてくれた。おかげでぼくはとても深い、ふかい**大後悔**に落ちこんでしまったのだ。

そして、

彼の送ってくれた数枚の写真とメッセージはかれへの羨慕（xian mu）を駆り立てた。

左の影（シルエット）は彼自身。自動シャッターでしょう。

話が前後したり早送りされたりで読者には申し訳ないが。

実は、今、翌日（９日）の午後3時である。

フフホト市の繁華大街にいる。

包頭（バオトウ）に今から出発する。メンバーは四人。ぼく以外は金トンさんと、あとは丁さんの叔父さん・劉恩情氏の会社の方である。

昨日はシラムレンには泊らなかった。包を覗いているとき、鹿児島の丁さんから国際携帯が入った。

「オオイシさん。今、何してますか?」

「おお、丁さん、今、草原（ツァオユェンと中国語では言います。）にいる。すげぇ寒いよもしかしたらここには泊らないかも知れない。」

「そうですか?もし、今日、午後フフホトに帰るなら私に言ってください。叔父さんが一緒に食事をしたい。と言ってます。ホテルも叔父さんの知ってるところで半額で泊れるそうです。もし、そこに泊らないなら私に電話ください。」

一旦、電話を切ったあと、僕のあたまの中にはシラムレンの夜中の３６０度の星空や朝の日の出の美しさなどすっかり消えてしまっていた。

「ぼくはここの包に泊ります。」と言う彼が気の毒にすら思っていた。

「昨夜は包の中は案外寒くなかったです。よく眠れました。ぼくはどこでも大丈夫ですから。そうそう、夜中に包の窓のところに馬が来て中を覗いてました。目が覚めたので外に出たら　星がいっぱいでした。

明日の朝は晴れる、朝日が拝めると、楽しみに寝ました。

だけど、朝起きてみたら霧雨というか、けぶっていて水平線に上る太陽ははっきり見えませんでした。じつは楽しみにしていたんですけどね。」

丁さんからほどなく電話が這入った。帰ることにしました。早かったら、帰ってから「内蒙古博物館」でも行くつもりでいた。　丁さんが言った。

「大石さんはホテルに戻っていてください。金トンさんがホテルに迎えに行きます。」

「そして、新しいホテルに案内します。夕方、迎えに来ますから、一緒に皆で晩餐会をしましょう。と叔父さんが言ってます。わかりましたか?」

一度は叔父さんにもお会いたかったし、明日からお世話になる包頭のツアーのお礼や持ってきたほんの気持ちばかりのプレゼントも渡すいい機会だったので,丁さんのこころ配りに甘えることにした。

・・・それらしき二枚の写真は、上が内モンゴルの大富豪・劉恩情氏とのスナップ。下の写真は真ん中が金トンさんと会社の同僚。手前の人は確か陳さん（上海人）で、金トンさんとこのあとずっと一緒の行動をしました。

フフホトの観光地では行きたいところが３つあった。

ひとり歩きを予定していたので郊外にある『昭君墓』は無理だろうと思っていた。『地球の歩き方』には（見どころ・・・）というページがあって★マークでランク付けがしてある。

実は「内蒙古博物館」はいちばん気になっていた場所だった。★１つだったけどここは数年前内モンゴルで発掘された巨大恐竜の化石があることで知っていた。

館内左の入口を入るとすぐのところに巨大なマンモスの模型があった。その奥を突き当たり右折した奥にめざす恐竜の化石模型はあった。

朝、早いのに地元の小学生の団体が先生に引率されて課外学習に来ていた。

写真を撮ろうと、こども達をかわして前に出たところで見覚えのある男が立っていた。

ほんの一瞬だが自分がツアーで回っているのか?と錯覚をおぼえた。

昨日、「草原ツアー」で出会った日本人・佐藤くんだった。

中国旅行ではこういうことはよくあることで思いがけない偶然のひとコマだった。

金トンさんが,お寺に行く前に『昭君墓』に行きましょう、と言った。市内から８キロほど離れたところにその場所はあった。

ウイークデーだったせいか『昭君墓』公園は観光客も少なく、広い整備された公園はのどかな秋の日差しを浴びて、とても心地よい気分だった。（金トンさんのおかげです。謝謝多分独りでは訪れなかった場所だったと思う。）

王昭君と言っても失礼だが知らない方も多いと思う。実はぼくも中国の旅をするから少しは知っているものの詳しくは知らない。

折角、彼女（王昭君は女性です。）の墓まで参ったのだから逸話（正史は殆んど無いらしい）を書いてフフホト日記の終わりにしたい。

●王昭君物語

王昭君は楊貴妃,西施、ちょう蝉（セン）と並び古代中国の四大美人といわれている。

当時の時代背景

紀元前５１年,前漢の宣帝（元帝の父）の時、てこずっていた北の匈奴が和睦を乞うてきた。匈奴が内部紛争で分裂、弱体化して、漢に対抗できなくなってきた。

匈奴の王、呼韓邪単于は長安に赴き、臣下の礼をとった。

これにより漢の北方の脅威が除かれた。特に匈奴の領地に近い集落の人々は毎年、冬になると匈奴の略奪を受け悩まされていただけに喜びも大きかったという。

宣帝は単于に皇族と同等の地位を与え、金銀財宝なども贈るという最高の処遇をした。

２年後、宣帝が没し、皇太子が跡を継いだ。　**元帝**である。

元帝は宣帝ほど優れた才は持ち合わせていなかったが、宣帝のおかげで何事もなく治世が続いた。

紀元前３６年、分裂していたもう１つの匈奴が漢軍に滅ぼされた。そしてその匈奴の大将（単于）の首が長安にさらされた。

「漢に背いた蛮族は皆このようになるのだ。」

この事件は漢に服す他の民族を震え上がらせ、とりわけ同じ匈奴である呼韓邪単于は大いに危機を感じた。

なにしろ宣帝の時代に和を乞うてから１３年、一度も長安に参内していなかったからだ。こうして呼韓邪単于は自ら長安へ上ることを決心したのである。

後宮でもっとも醜い女

王昭君は王氏（現在の湖北省沙市（長江沿い）という豪族の娘として生まれた。若くしてその美貌は世間で噂されるほどに美しく、その噂は王宮にも届き、１８歳のとき後宮入りをはたした。

当時、元帝は三千人といわれる美女を後宮に住まわせていた。元帝はあまりに多すぎるので係りの絵描きに似顔絵を描かせて、気に入った女を寝室に呼ぶと言う具合であった。

後宮の女たちは皇帝の寵愛をうるためには自分をより美しく描いてもらおうと画工の前に金品をつんだりした。

その有様を冷たい目線で傍観する女がいた。王昭君である。

王昭君は画工（毛延寿という）に決して賄賂を贈ろうとしなかった。実際、彼女は自分の美貌に自信があり、周りの女たちも一目おく存在であった。

女たちにちやほやされて有頂天の毛延寿は自分を見下したような王昭君が気に入らなかった。

『あの女、わしを軽んじおって,いくら美しかろうがわしの気分次第だということを思い知らせてやる。」

こうして、画工に嫌われた王昭君は、似ても似つかぬほど醜く描かれてしまったのである。これでは皇帝からお呼びがかかることはなかった。

単于（君主）の願い

紀元前３３年、呼韓邪単于（こかんやぜんう）は長安で元帝に謁見した。属国でありながら１６年間も一度も参内しなかったことに対する申し開きをし、匈奴が漢に恭順していることを示そうとしたのである。

「臣はこの十数年、常々入朝したく願っておりましたが、ご存知のとおり、わが匈奴は長きに亘って内部紛争が続き土地を離れることが出来ずにいました。この度、漢帝が別の匈奴を討伐してくださり、やっと参代がかないました。ここに、改めて和を結び、漢と匈奴の安寧のために尽くす所存です」

「うむ！」

単于の心配とは裏腹に元帝の機嫌はすこぶるよかった。長年の北西の脅威が払われたことに対し感銘に浸っていたのである。

「天子に申し上げたきことが・・・・・」

呼韓邪単于は女たちが騒ぎ、音楽で賑わう宴の場で静かに口を開いた。

醜女選出

「何？！漢と婚姻を結びたいと？」

「はい、漢室の女性をぜひわが国の皇后に迎えたいのです。」

元帝は考えた。匈奴と親戚関係にあることは、今後の外交上、漢にとっても有益なことである。元帝は快く承諾し、吉日を選んでふさわしい女性を与えることを約束した。

漢室の女と言えば皇后が王姓であることから元帝は例の似顔絵の中から王姓の女だけを選出させた。一枚を取り出し軽い驚きを覚えた。

「なんと・・・このような醜い女が後宮にいるのか、よくぞ入れたものだ。よし、単于にこの女を与えよう。」

じつは元帝は自分の美女たちをやるのが惜しくなっていたのだった。っそこで、後宮内の醜い女を嫁がせようとおもったのだ。いうまでもなく王昭君が選ばれた。

当然、呼韓邪単于（こかんやぜんう）のよろこびは大そうなものだった。呼韓邪単于が匈奴に帰国することになり、挨拶のために元帝に謁見した。

・・・・・・・・・・・・・・

顔を上げた王昭君の眼に驚きの顔で固まっている元帝の顔が見えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なんということだ！」後宮にあれほどの美人がいたとは、本当に似顔絵の女なのか！

毛延寿を呼べ！！。」

元帝の怒りとくやしさは頂点に達していた。皇帝がいまさら「返せ！」とは口が裂けても言えない。画工を厳しく問い詰めたところすべてが露呈した。画工・毛延寿は処刑された。

そして、同じ年の５月、元帝が急死したのである。

王昭君は呼韓邪単于にはもちろんのこと匈奴の民にも大切にされ、やがて男児を設けたが、とついで三年目に呼韓邪単于も亡くなった。

そして匈奴の慣習に従って呼韓邪単于の正妻の子（皇太子）に嫁ぐことになった。王昭君は嫌がったが認められず仕方なく皇太子の妻になり、やがて二女をもうけた。

王昭君が匈奴に嫁いだことによって、長い間、紛争を繰り返していた匈奴と漢に６０年余りに及ぶ平和がもたらされた。後の人は彼女を両国の和睦の象徴として賞賛したという。

ぼくが訪れた『王昭君公園』の墓に向かうメイン通りの中央には共に馬に乗り、寄り添うように並んでいる像が建てられている。

横のプロフィールとその上の工事現場はお世話になった丁さんの叔父さんです。

右は叔父さんこと劉恩情氏の会社のＨＰ

http://www.mengzhengyaoye.com

『昭君墓』を後にしたぼくたちは次の目的地『大召』へ向かった。

そのあと昼食をすませ佐藤くんと街中で別れ包頭へ向かった。

次は包頭へとびます。

包頭市は市街地が大きく東西に分かれている。

東の市街地の下車駅はパオトウ東駅で西の下車駅はパオトウ駅である。

このふたつの街は建設路という幹線道路で結ばれている。その東西の真ん中、ややパオトウ駅側に成吉思汗草原生態園という巨大公園がある。

占有面積 770 公頃。南北 4ｋ せまくて長い。東西 2.2ｋ 海抜 1034ｍ(1 周すると10ｋを越える)

全国城市中最大的天然草原園である。街中からここに足を踏み入れ、しばらくすると自分が別の世界に突如入り込んだような錯覚におちいる。

シルクロード、敦煌にある鳴砂山も素晴らしかったけど、ここ『響沙湾』の砂漠は砂遊びのスポットとしては、はるかに、『月の砂漠』のモデルともいわれている鳴砂山を凌ぐところだった。ラクダの背にゆられゆられて1 時間、シルクロードを旅する商人になったようだ。

9 月 9 日（土）午後。金トンさん運転のブルーメタリックのビュイックに乗っている。

いまから目指すパオトウまではおよそ2 時間のドライブである。

パオトウ旅遊のいちばんの楽しみは砂漠を見る（楽しむ）ことではあったけど、実は『黄河』見学にもかなりこだわっていた。

かってＮＨＫの「大黄河」というＴＶ番組を見て以来、中国二大河川のひとつである黄河は宋次郎の奏でるオカリナの音色と共にぼくを魅了してやまない存在だった。

黄河上流の蘭州では黄河第一橋から黄河を眺め、羊の皮袋で出来たいかだで実際に黄河を1キロほど下った経験がある。（写真1，2）

２００４年5月、鄭州市の北部にある黄河風景区で黄河中流のとてつもなく広い河川敷をホバークラフトに乗って快走した。（写真3，4）

昨年の１１月、済南市の北を流れる黄河下流にかかる浮橋を歩いて渡りながらとうとうと流れる大黄河を眺めてきた。（写真5）

パオトウを流れる大黄河は、嘗て、匈奴が、そしてチンギス汗が率いる大蒙古軍が氷結し、大地に化した黄河を馬で渡ったところである。

大草原を蒙古馬で駆けたついでに、パオトウの黄河の流れを実際、自分の目で眺めてみたい、触れてみたいという気持ちがつのっていた。

ぼくは、何気ないフリをしてハンドルを握っている金トンさんに声をかけていた。

「金さん、包頭 有 黄河（ホン ファ） マ ？」

すぐ返事が返ってきた。

「有 有 （ヨゥ ヨゥ） 要看？」 （ありますよ、見たいですか？）

「我很想看」（とても見たいですね。）

一番、上のあたりがパオトウを流れる黄河

ところで、黄河の上流、中流下流とはどのへんをさすのだろうか？

上流は水源（青海省）からオルドスの河口鎮（托克托）のあたり、地図上ではフフホトと包頭を結んだやや南までをいい。

上流は全体としては流れがはやく、細いけど、標高が高いので、あちこち場所によって凍結する。上流の流域面積は３８．６万平方キロメートルで、全河流面積の実に５１％を占めている。

、そこから河南省の鄭州にほど近い桃花谷までを**中流**としている。

そして、開封から渤海にいたるあたりを**下流**といっている。

中流（包頭から南下して鄭州付近まで）は４６％、下流はわずか３％に過ぎない。

黄河は中流で大きくこぶのように蛇行（北上）していて、そのあたりの標高差は激しくで冬は凍結する。

落差の大きい滝もあれば、極端に狭い川幅の場所も有る。

黄河全体の公式の長さは５４６４キロあり、そのうち洪水の被害のもっとも大きいところが標高差の少ない下流なのである。

凍結をもっと具体的にあげると、凍結し始めるのは１２月のはじめで、解氷しだすのは平均で三月の下旬であるという。

氷の厚さは、４０～９０センチといわれ、凍結している期間は３～４ヶ月間だけど、実際に、河を渡れるのは氷結し始めてから１ヶ月近くを要するといわれる。

もっとも、昔はもっと、凍結期間も、氷の厚さも大きかったらしい。だから、チンギス汗の活躍した時代は少なくとも半年ちかくは、馬が黄河を渡ってオルドスの地を駆け回ったのだろう。

黄河と長江、このふたつの巨大な河川は、４０００年の中国歴史を語る上で、はずすことのできない存在である。もっとも、土砂の少ない南の長江流域（上、中流）は宋の時代までは未開の地域のように言われていた。

しかし、１９４８年以降に四川省の成都市郊外で遺跡（三星堆）発掘された。その時期が紀元前１６世紀と言うことがわかり、　そこにあらわれた黄河文明とはちがう、全く別の古代都市の出現に人々は驚いたのだった。

謎の都市の解明はまだあきらかにされていないが、文明と河川の関係の奥の深さを改めて知らされた。

ところで長江（６３８０ｍ）と黄河（５４６４ｍ）の違いはいろいろある。

まず、①凍結する、しない。

②標高差大，小。

③蛇行の差などの外に

④水のにごり方がある。しかし、なんといっても

⑤**水量が違いすぎることである**。

長江の総流水量の１６分の１、流域に供給できる水量は２０分の１にすぎないのである。

黄河流域つまり黄土は昔から農耕に適した土質といわれている。

人口も、前漢時代には４８００万人に達し、当時の中国総人口の８０％を占めていた。

その後人口は減り続け、唐の時代には６０％になり、そして、宋の時代から経済の中心が南に移り始めると３０％となり、現在は全人口の１５％ほどまでに減っている。

こうした減少傾向にはいろいろな原因もあるのだろうが自然現象としての**ひでり**が水量の減少を引き起こし、（降雨量の低下）が『砂漠化』を一層すすめていくことになる。

そういう自然現象に輪をかけるように、最近では近辺の地区の工業化が進み黄河流域の水を使う量が供給を上回ってきていると言われる。

それに伴い工業汚染が問題化しているのも事実である。

最近ではオホーツクへ流れる松花江周辺にある化学工場からの汚染漏れ事件はまだ記憶に新しいところである。

外交問題（ロシア）になり明るみに出たけれど、中国国内だけならまだ多くの汚染漏れがないとは言えない。

「そのうち黄河は黒河に名前を変えなければ」なんてことだけは避けなければならない。

この二つの巨大河川への取り組みこそが未来へ向けた中国の盛衰（命運）がかかっていると言って過言ではない。

ぼくは黄河を眺める度に、チンギス汗の駆けた、あの時代の黄河が甦ってくるよう願ってる。

（参考文献：西野広倖　「馬と黄河と長城」の中国史　ＰＨＰ文庫）

黄河の河川敷に出る道を途中で間違えてしまいスピードウエィを逆走しながら、ようやく念願の黄河に到着した。

黄河の水に触れ、思い切り小石をなげたり、しばらく遊んだ後ぼくらは包頭をめざしＵターンした。

クルマがパオトウの市街地に着いたのは夕方の６時をすでに過ぎた頃だった。

車窓から射し込む陽の光はまだ真昼のようにまぶしく、昨日の寒さがうそのような陽気だった。

「わたしたちの会社に行って見ませんか？」

という金トンさんの声に「ぜひ。」と二つ返事をした。

というのは、留学生の丁さんが

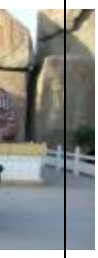
『叔父さんは信心深い人ですよ。工場に大きな仏様の像を作りましたよ』

と言った言葉を思い出したからである。ぜひ見てみたいと思っていた。

下の写真はその仏像と工場の写真です。

劉思情社長（丁さんの叔父様）は目下、フフホト市にもに宅地造成中の巨大プロジェクトを展開中でその現場を数時間前に見てきたばかりだった。

下は既に発売中の一戸建て住宅（２所帯）と１０階建てマンション群の模型。



予約してもらったホテル・シド大酒店（写真7．8）は新しく出来たばかりの包頭一の高級ホテルだった。

来年（２００７年）にはこの近くにアジア地域では最高級のホテルチェーンである『シャングリラホテル』が開館を目指して既に建物の全貌を見せていた。

包頭の街は他の中国の城市の再開発とは違い、あたらしい地域に新しい道路をつくり、そこにあたらしい工場、企業を誘致していく街づくりを展開している。

近い将来、（もしかしたら既に幾つかはそうなっているのかもしれないが）包頭市は内モンゴルの行政・観光・工場・そして文化の拠点になるのでは、とそんな空気を感じた。

翌朝、ホテルの朝餐で若い団体客に出会った。

聞けば、広州から飛行機で観光に来たんだと言う。広州の会社の社員旅行（総勢５０名）で来たらしい。

昨日、『響沙湾』と『チンギス汗草原生態園』で遊び今日は広州に帰るんだと言う。

広州～包頭間の航空路が新しく（?）開設されたから来たんだと言っていた。

「砂漠遊び」と「草原」というコースは地理的には新疆（シルクロード）や青海（草原）方面よりかなり身近に行ける魅力的な観光コースと言えるのではないだろうか。

ぼくの知っているかぎりでは、中国人は、眺める観光より、参加、体験型の観光を好むように思う。馬に乗ったり、ラクダに乗ったり、砂漠をオートバイや戦車で駆け巡ったりするのは、かれらの最もよろこぶ遊びなのだ。

その夜は包頭の（おそらく）高級飯店で金トンご一家（奥様と息子）、奥様や金トンさんたちのお友達の女社長・宋さん、それに劉さんの会社の若い男性・陳さんあと一人の男性を交え賑やかな晩餐会によばれた。

珍しいモンゴル料理を説明を受けながら戴いた。

特に、豆腐料理はとても美味しく、日本の豆腐とそっくりだったし、ゆば料理もたしか読み方まで同じ名前、ユバで通じたような気がした。おから料理に到っては京都で食べているようだった。

どちらかと言うと「食道楽」ではないので食べ物は美味しいか、まずいかしか意見が言えないので食事の時は、話題不足で、いつも招待してくれる中国人には申し訳ない思いである。

したがっていつも「ジェ　是　シェンモ?」「ナ　是　しぇんも?」の繰り返しで会話が繋がっていかないのが我ながら情けない。

酒は白酒が有名のようだ。長沙の白酒ほど強くはない（３８度ぐらい）が後口が幾分、甘い感じがして美味しかった。

写真は金トンさんご一家と、食事をしたレストラン。

今日は包頭二日目の朝である。

包頭の街は空は青く高い。

聞いていたようなほこりっぽさなどまったく無かった。

いまの季節が、日本の秋と同じく、いちばん良い季節なの

かもしれないけど、少し空気が乾いているかな、と思う程度で中国の他の街の空気より好きだった。

道路幅も広く、殆んどが直線路である。パオトウは工場の町で、何も無いところだと聞いていたが、そんな灰色のイメージなどまったく無く、あたらしい近代都市というイメージを持った。

7：30　運転手の金トンさんの運転するビュイックがホテルの玄関に着いた。午前中は折角来たのだからと、包頭市街から北東へ70km、陰山山脈の五当溝にある内モンゴル最大のチベット仏教寺院　『五当召』へ案内してくれるという。

五当召は17世紀後半に創建され、五当とはモンゴル語で柳の意味なんだそうだ。

山の麓から斜面に沿って数多くの堂が階段状に建っている。

小ポタラ宮と言われているらしい。召とは廟の意味らしく、それぞれの堂はそれぞれに貴重な特色があるのだろうが、そっち方面の知識に乏しいぼくにとっては、その宝物や経典の価値はわからなかった。

ただ、最上段まで見てみようと各仏堂を数字を追いながら上へ上へと見て回った。

金トンさんは知っているのかも知れないが日本語で聞いても判らないのに中国語で説明を受けたってさっぱりだと思い聞かなかった。

明日は最大の目的地大同市に向かうことになっている。今日の教訓を生かして明後日の『雲崗石窟』と『懸空寺』の見学には絶対に日本語ガイドを頼もうと決心を新たにした。

それにしても五当召への往復の道中はひどかった。ビュイックは例によって乾いた河底を走っていく。車体はもう土灰をかぶり真っ白だった。

包頭に戻ってから洗車に15分もかかってしまった。左の丘の中腹では大掛りな道路建設が現在進行中だった。（中国は工事に関しては予定が未定だが）近い？将来「五当召」への時間が半分に短縮されるかもしれない。

一旦、包頭市にもどり昼食を食べ終えたぼくらは、本日の本命である砂漠『響沙湾』へと向かった。

寧夏回族自治区から流れてきた黄河は、内モンゴルの中西部に入って北へ向きを変える。

陰山山脈にぶつかった黄河はこんどは東から南へと馬蹄形を描いて流れる。

この黄河に囲まれた地帯がオルドス高原で、砂漠草原となっている。

黄河南岸のクブチ砂漠には鳴き砂現象で知られる砂丘があり、そこが『響沙湾』とよばれている。

到着すると、そこには何所から集まったのだろうと思うほどの大勢の観光客がリフトの順番を待っていた。

二人乗りのリフトに乗り響沙湾ジャーランド？（正式名称は分からない。）に渡ると、まず、砂が靴に入らないように布袋を膝までつける（有料10元）。長沙からの団体客があり、そのなかに紛れ込んだおかげで無料で借りた。（写真あり）

キントンさんたちは靴をぬいで裸足になっていた。

丁さんが「風が強いと、眼が開けられません。出来たら、海水メガネが必要です。」

とのアドバイスがあり、大判のマスクとゴーグルをポケットに忍ばせていた。

二つとも快晴、無風の天候のため無用の長物となってしまったが、他のツアー客たちは顔が見えないくらいの大きなマスクにサングラスをかけてラクダに乗っていた。

ぼくたちは金トンさんの勧めでラクダ乗りから体験することにした。

何年か前、兄達と新疆シルクロードのツアーに参加したとき、敦煌・鳴沙山で７００メートルほどの距離をラクダに乗ったことがあったが今日は１時間の砂漠の行軍である。

もしかして、ラクダが走りだしたらどうしょう、それこそ映画「アラビアのロレンス」を体験できるかもしれない、とひそかに期待をしたが、その通りにいかなかった。

それでも広大な砂漠を上ったり下ったりと移動して、お尻が痛くなるほど乗りまわった。

途中、駱駝引きの男が「しばらく休憩する。」というので皆（８名ぐらいのグループ）はてっきりラクダから下りるのとばかり思っていた。

ところが、乗ったままでラクダだけが立ち休憩をするのだという。

「何で下ろさないのか?お前が休憩してるだけじゃないか?」

と乗ったままの客たちは一斉にブーブー抗議したけど、駱駝引きは知らんふりを決め込んでいた。

ラクダを下りる頃はもうお尻が我慢できないほど痛くなっていた。

こんどは沙すべりに挑戦することになった。これも「鳴沙山」で経験済みだったけど下に下りないと帰りのリフトに乗れないように仕組まれていた。

この砂すべりのせいで、翌日の懸空寺ではカメラが使えなくなるという、大変なパニックが起きてしまったのだ。

答えを明かすとこの時,砂糖のような極細の砂がジーンズのポケットの中に入り込んでいて、ポケットに入れたデジカメのレンズ部分にその砂が入って故障してしまったのである。

こうして朝 7:30 からスタートした包頭（パオトウ）でのイベントは終った。

内モンゴルの旅は本当に「何から何まで」という一見、意味不明な日本語ではないが、金トンさんたちのお世話になり放しだった。

はじめは乗物だけ使わせてもらおうかな?と思って甘えたのだったが、これほど
世話になるとは考えてもいなかったのである。

おかげでとても楽しい思い出に残る旅が出来たことを感謝したい。
実は、この日はまだ後が続いていた。

最後の晩餐をしょうと言う。そして、成吉思汗草原生態園をドライブしながら案内してくれるという。

かくして、いちばん最初に書いたように、もう時間も遅く殆んど閉園間近になっていた公園を無理に頼んでの外周ドライブとなった。

しばらくは、ラクダの大群を見たり、造られた草原を、「スケールの大きいものを造ったものだ、と眺めていた。

走っている時間の長さと延々と続く外の景観がいま公園の中を走っているという通常の感覚をはるかにオーバーしてきていた。

入るときは、確か、街中から入口があったはずなのに。

そのうち本当に自分が今、何所を走っているのか、もしかしたらパオトウを離れ、郊外を走っているのではないか、と本気で思うようになり始めた。

やがて、あたりが暗くなり、そこここに動物達が歩いている。全く狐につままれた思考の中に自分がいた。

どれ位の時間がたったのだろうか、やっと出口に出て我に返った。

下の写真はパオトウ市の市街地の半分近くを占める成吉思汗草原生態園

左下に包頭駅が見える、右下（見えないけど）に包頭東駅があり、その上が街。

帰ってから、そのことを丁さんに話すと、「そうですか、そう言えば金トンさんが言っていましたよ。シラムレンなんか行かなくてもここの草原で馬に乗っていくらでも走れるし、包もちゃんとあるのにね。」と。

次の訪問地「大同・雲崗石窟

雲崗石窟は、山西省最北部の都市、大同市の西、武周山の南麓にある。３９８年、鮮卑族の拓跋氏（タクバツシ）がここを北魏王朝の都とした。４６０年，文成帝は雲崗石窟の造営に着手した。

４９４年に北魏が都を洛陽に移した後も造営は続けられた。２００１年には世界文化遺産に登録され世界中の人々がここを訪れるようになった。

次の旅の始まりはいつも乗物の中から始まる。ぼくの書き方のクセなのかもしれない。

今、１１日の朝１１時が少し過ぎたところである。

進行方向の右手にはのどかな、いつもながらの中国の田園風景が広がっている。車内の温度は２５℃くらいだろうか、まぶしいような、あかるい日差しが窓際の机の上のメモ帳を照らしている。

左手の窓の方を眺めると、内モンゴルの牧草地帯が視野いっぱいに展開する。

ときおり、車窓のはるか彼方の山腹に、おびただしい数のひつじたちの群れが見える。

車窓からの眺めはいつもぼくの中国旅行の楽しみの時間である。

今朝８時３０分に金トンさんと陳さんがホテルまで迎えに来てくれた。

「プレゼントがあります」と言いながら、紙袋と長い筒箱を車からとり出した。

「これは劉思情さんからです。」と金トンさんはぼくに向かって筒のほうを差し出しながら言った。

「なにもお構いができませんでしたが楽しい旅が出来ましたか?」　と言ってましたよ。

「それから、これは家内からです。」

と、ちょっとはにかんだように言いながら黒いしゃれたデザインの紙袋を差し出した。中には二つの箱が入っていた。

実はすぐあることがピーンときた。中身の品物についてである。。丁さんに来る前に何気なく訊いたことがあった。

「丁さん、パオトウはカシミヤが特産品なんだってね。金トンさんは安いお店を知ってるだろうか?」

「大石さん、安物は勧めませんネ。いくらでも安いものはあります。でも、いいものを買うほうが良いと思います。ブランド品があります。もし、大石さんが欲しかったら　金トンさんにブランド品の工場を案内させましょうか?」

と、丁さんが言ってたのを思い出したのだ。その時は、

「いいよ、いいよ工場見学なんかしなくても時間が勿体ないから。」と答えたのを憶えている。

この袋の中は「もしかして・・いや、きっと」と、大変な気を遣わせてしまったことを後悔した。

でもこれからの旅に紙袋をさげて移動するのは大変だった。

折角の立派な包装を金トンさんには悪かったけど、大同のホテルに着いたらすぐ、戴いた二個の箱を開いてみた。

中には予想したとおりの素敵な男女物のマフラーが入っていた。

それは、もちろん、ブランド品に違いない柔らかな肌触りのマフラーだった。

戴いたもう一方の「掛軸」にも実は、またあらたなエピソードが発生したのだが、こちらはもっと先の方でお話ししなければならない。

さて、話を戻す。

ぼくの乗った火車（汽車のこと）は9：15発のニンポー（寧波）行きの硬座寝台である。

学生時代利用したあのなつかしい急行「きりしま」二等寝台と同じ型である。

大同市までの乗車時間は6時間と時間表に出ていた。

この汽車の始発駅が何処からなのか分からなかったけど乗客も少なくあたりには人のけはいもなかった。

まもなく着くフフホト駅では、たくさんの乗客できっと車両が埋まるのだろう。

上段に男性が一人眠っているようだ。寧波まで行くのだろうか、いったいどれ位の時間がかかるのだろう。

大同までが6時間とすると、地図でみたところ8倍くらいの距離である。北京、上海を過ぎて寧波に着くのに2昼夜、48時間はかかるに違いない。

しかし考えてみるとぼくらも学生のころは鹿児島駅を夕方発った急行「きりしま」は48時間つまり2昼夜かかって翌々日、東京有楽町駅に着いたのだった。

当時の旅はそれが普通だった。思えば、もう40数年昔のことである。

やがて新幹線が出来て時間は短縮されたけど、たいていの人は飛行機を利用するようになった。人々の所得が増え、航空運賃がそれほど負担にならなくなったことも由来しているのだろう。

それでも夜行寝台が姿を消したのはそれほど昔のことではない。

中国も空のインフラは日本と変わらないぐらい発達してきている。それこそ片手で数えられる時間があれば中国全土を行き来することが出来る。ただ一般の市民がそれを簡単に利用出来るまで所得水準が達していないというだけである。

「中国人の一般市民はたいへんだなぁ」といくらかの差別意識がはたらくのも過去のことになる日がそう遠くないのかも知れない。

話は汽車の中にもどる。今、11：30、ということは3時間が過ぎたことになる。

豊鎮というところを過ぎると「万里の長城」を越える。長城は北京から、ここ大同を越えオルドスの砂漠の南際にそって銀川市を過ぎたあたりで一旦消える。多分、壊れて現存していないのかもしれない。

秦の始皇帝（前２４６年）が天下を統一したあと、本格的に長城をつくりはじめてから、明の大規模な工事により我々が眼にする万里の長城になるまで、じつに１８００年を経ている。
この間、ほとんどの王朝が長城を造り替えたり、直したりしてきた。

中国が始皇帝により統一されるまでは各諸侯国は自国の周囲に城壁をつくっていた。

特に北方の各諸侯国はお互い同士だけではなく、北の移民族からの襲撃を防ぐという別の大きな目的があった。

天下を統一した秦は、万里の長城として活かせる北の城壁以外はすべて土地の民を動員して取り壊したといわれている。

中国の歴史を眺めてみると、匈奴を筆頭に、いろんな異民族が、中国に侵攻し、略奪、殺戮をくりかえしてきた。

侵攻されたばかりでなく、五胡十六国時代（304～439）五代十国時代（907～960）金（1115～1234）の時代のように北から長城を越えて漢に入りそのまま住み着いてしまった多数の異民族による国も築かれた。

かって強力な騎馬軍団を擁していた異民族（匈奴、鮮卑、契丹、突厥など）も、中国内に定住するうち、騎馬の力がおとろえてきて今度は新たな遊牧民族の侵攻にそれまであった長城を補修したり、増築したりして、騎馬の侵攻に備えるようになった。

ぼくは走っている列車の左車窓から遠くに、しかしはっきりと見える、のろし台が等間隔で現れては消え、また現れては去っていくのをぼんやりと眺めていた。

今からはるか１５００年～１６００年も昔（、日本だと卑弥呼の古墳時代である）、の様子を想像していた。何千、何万の騎馬軍団が突如、あの山の向うから津波のように押し寄せてくる姿を、そして、おおあわてで、のろしに火をつける見張り番の兵の姿が浮かんで消えた。
その遠くに見えていた山並みが段々と列車に近く見えてくるようになった。
数分おきに山の頂にのろし台が見えていた。

横にいる（最初に上段で眠っていた）中国人が「もうすぐすると変わった形の山がある」と言う。それよりぼくがいちばん訊きたかったのは万里の長城はいつ見えるのか?ということだった。

「あぁ、もうすぐ見えるよ。でも、汽車の中からは土塁だけだよ。」と、そっけない答えが返ってきた。

写真6番目、7番目が念願の「大同の長城」である。この長城をまたぐ間、ぼく

のデジカメは撮影モードに切り替えてあった。のろし台からこの朽ち果てて土塁と化した長城を延々と、と言っても5分ほどだけど撮り続けた。（お見せできないのが残念。）

男は太原に行くらしい。おしゃべり男で、この路線をいつも仕事で使っているという。

変わった山の名前は『臥仏山』と言って格好が仏が横向きに臥しているように見えるのだそうだ。どうしても、その姿をぼくに見せたいらしい。

左が『臥仏山』で右が魚のいない沼）

正直、あまり興味はないのだが、「楽しみですね、どんな山か。」と答えておいた。

左手に湖が見えてきた「湖ですか?池ですか?」と尋ねたら、「この沼は大きいけれど魚はいないんだ」と言う。「沼の底は全部砂だから魚のエサがないんだ」。との答えだった。

（車中の話がつづく）、

この後大同駅が近づくまで、とてもおしゃべりな車掌が話しに割り込んできたのだ。

どういうきっかけだったかは憶えていないが、とにかく横に座り込んできて太原の男と三人でのおしゃべりタイムとなった。

もっともしゃべりの比率は4対4対2と言ったところだろうか。おもな話題は、今から行く雲崗石窟と懸空寺を見学したあとのぼくの行程についてだ。

余計なお世話でもあるが実はぼくも迷っていたところだったので真剣に討議に加わることにした。

、五台山からの先のコースについてであった。五台山から次に何処に行くか、そのいちばん理想的な交通手段についてのふたりの意見がいつまでも一致しないのだ。

ただ、唯一、同意見だったのが「平遥は面白くない」「あんなところはわざわざ行く所ではない」「五台山は2日いてもいい」という。

「平遥」～「太原」～「五台山」～「懸空寺」～「大同」（雲崗石窟）～「北京」の今と逆のコースが一番いいんだそうだ。だけど、もうすぐ大同に着くじゃないか、何もこのまま太原まで行くこともあるまい。

つまり、平遥なんかに行くよりも折角、五台山に行くのなら、ゆっくり2日ぐらいかけて五台山にいるのがいいというのが二人の意見のようだった。

ここにきて世界遺産「**平遥**」が遠くに去り、かわって福建省の世界遺産「土楼・**客家**」が目の前にグーンと近づいた。大同のホテルに着いたら早速アモイの上山さんに電話をすることにした。

目的地（大同駅）に着いたのはもう4時がとっくに過ぎていた。（写真）

昨夜「地球の歩き方」に書いてあった「雲崗賓館」に電話して今日の泊りの予約をしていた。その時の電話では、どうも本に書いてあった通り名とフロントの告げた通り名が違っていたようだった。

雲崗賓館には中国国際旅行社があって、そこでは日本語ガイドが３００元、車のチャーターが1日４００元～と書いてあった。

今回の大同の石窟と寺の観光は『日本語ガイドに説明してもらうこと。』を旅の第一

のキーワードにしていた。

ホテル内でゆっくり相談できると思いこのホテルを選んだのに住所が違うというのはどういうことなんだろう。でも、これ以上のことはぼくの中国語では解明できない。

とにかく、明日からの行程をガイドの件をふくめて早く決めたかった。

本には大同駅前にも中国国際旅行社があるように書いてあった。

うるさくつきまとって来た客引きタクシーの一人に「この辺に旅行社があるか？」と尋ねてみたがそんな旅行社はないという。

仕方がないので「雲崗賓館」と字を書いて見せるとＯＫ，ＯＫ「乗れ」とドアを開けた。

わずか5分ほどでホテルに着いた。ホテルの名前は「雲崗国際酒店」と書いてあった。しかし、電話番号は『地球の歩き方』の「雲崗賓館」と同じ、(0352)5863888なのだ。？？？

あとで、ここのホテルで紹介された日本語ガイド・任麗英さんにそのことを訊いてみた。

答えは、「雲崗賓館」はもうありません。「雲崗国際酒店」に変わりました。と聞いてはじめて納得した。

時計の針は の時を指していた。早く明日の段取りを決めないと、とチェックインもそこそこにフロントで聞いた旅行社を尋ねることにした。

そこはホテルから眼と鼻の先にあった。中国国際旅行社ではなく「大同和平国際旅行社」と看板に書いてあった。

旅行社にしては一般の住居のような小さな建物でドアを開けると子供が2人遊んでいた。でも対応に出た女性の感じがとてもよく、人柄も信用出来そうだったので、とりあえず明日のガイドをお願いすることにした。

「明日の朝8時に、日本語ガイドがホテルに迎えに来ます。」という。

「男性ですか？それとも小姐？」と尋ねてみた。どう思ったのか知らないが「女性ですよ。」とにこっと笑った。（笑いの意思是我不懂）

1日200元だと言う。ぼくの携帯番号をおしえて旅行社を出た。ホテルの前に着くと陽が沈もうとしていた。（写真、大同駅の下の写真）

予定では、出来れば夕食前に市内の名所を1～2箇所回りたかった。

ホテルのフロントで華厳寺はどこか？と聞いたらここから5分ぐらい。との返事が返ってきたので急いで行って見ることにした。

残念なことにもうお寺はとっくに閉門になっていた。

写真だけを2，3枚撮り、（写真）名物の刀削麺を食べに市街地に向かった。

日本語ガイドの任（Ｒｅｎ）莉英さんと。

9月12日（火） 朝

ホテルに迎えに来た任さんは流暢な日本語を話す和平旅行社の専任ガイドである。

年齢は32歳。「12になる男の子がいます。」にこっと笑った顔が可愛かった。

「雲崗石窟はむかし武周石窟とよばれていました。」

「雲崗石窟は敦煌莫高窟、洛陽龍門石窟、天水麦積山石窟とともに中国四大石窟のひとつに数えられています。」

「雲崗石窟の主要な造像は三世仏です。三世仏は過去仏、現在仏、未来仏を本尊にしています。」

・・・・・・・・雲崗石窟に着くまでの３０分あまりの車のなかで任さんの雲崗石窟の解説が始まった。

はじめからぼくの予備知識とはちがう説明だった。

「そのバクセキサン石窟ってどこにあるんですか?」すぐ、四川の楽山か大足あたりが頭に浮かんだ。でも返ってきた答えは違っていた。

「麦積山石窟は甘粛省にあります。194 の石窟があって塑像で有名です。粘土です。

莫高窟は壁画が有名です。雲崗石窟は石彫（セキボリ）です。そして龍門石窟は雲崗石窟の兄弟です。」

「時代はどうなっていますか?」と訊くと、

「南北朝時代（5世紀）からはじまって宋（13世紀）まで続きました。三尊阿弥陀仏です。」

そうか、知らなかったな。三大とばかり思っていたら四大か?また、行く所がひとつ増えてしまった。帰ったらＨＰで見つけてみよう。（調べて見ました。）

・・・ところで

ぼくの実際の雲崗石窟の見学ルートは右手の東部石窟群である第３窟から始まった。

帰ってからＨＰに説明入りの写真を載せようとおもいＩＰレコーダー（マッチ型の録音機）とCASIO の EXILIM を携えての見学だった。

帰ってから任さんの解説を何度も聞き返し、各窟の解説も書けるようになったけれど果たしてそれが面白いか?と考えてみたら、実際、あの大迫力の石仏群を写真で説明した所でどうなんだろう。目の前で聞いてはじめて感動もある。そう思って個々の解説はやめることにした。

ただ、以下の『曇曜五窟』だけは少し説明をしたいと思い載せることにした。

・・・・そういうわけでここからの内容は見学順序と関係のないドキュメントです。

「雲崗石窟でいちばん有名なのは**第２０窟**です。」

「露座の大仏と一般に言われています。この石窟は北魏の開祖である**道武帝**を模して造られたとされています。三世仏です。

前の壁が崩壊しました。その時、左側にあった像も壊れました。遼の時代です。」

（ケイジの解説）

鮮卑（内モンゴル）の拓跋部は華北の地の農耕地帯を支配すると急速に国力を強めてゆき、都を平城（今の大同市）に遷し帝位につき国号を魏と定めた。

３８６年に拓跋珪（タクバツケイ）つまり**道武帝**が魏王の位についた。

国号を北魏とし、それまであった部族制度を解散して、族長たちを貴族にして武民達を漢族と同じ戸籍に編入した。また、有能な漢人を高官に取り立てた。

「雲崗石窟のなかでいちばん最初に造られたのが**第19窟**です。曇曜五窟のなかではいちばん大きな大仏で石窟全体でも2番目に大きいです。高さは16.8ｍです。

460年に曇曜が雲崗石窟を第4代の文成帝の命で造り始めて、最初の石仏です。**2代目皇帝の明元帝**を模して作られたと言われてます。」

「**第18窟**も19窟とほぼ同じに彫られた石仏です。**第3代皇帝の太武帝**（423～452）を　模した石仏と言われていますが実は言われているだけでその証拠はありません。学者　のあてずっぽです。どこにも書かれた文字は残っていないのです。」

「他の石仏もおなじです。みなの想像です。」

「袈裟を羽織っています。左手ほ胸の前に置いています。そして、袈裟には小さな仏像がいっぱい彫り込まれています。「千仏袈裟」です。」

（ケイジの解説）

道武帝を継いだ明元帝は江南に成立していた宋を攻め、一時は黄河以南にまで領土を拡大していった。そして、明元帝の子として帝位についたのが太武帝である。

父の代に回復され強固になった権力基盤を背景に崔浩（さいこう）ら漢族の知識人の助言をえて政治、軍事両面の体制を一段と整備し、五胡の国々をつぎつぎに滅ぼして、ついに、華北の統一を完成した（439）

中国風王朝の建設をめざし、道士の冠謙之（368～448）を信任し、道教を採用、太平真君７年（446）廃仏毀釈の令をだして仏教を弾圧した。中国史上『三武一宗の法難』といわれ仏教の四大弾圧の最初となった。（崔浩も仏教嫌いだった）

北魏仏教は打撃をうけたが太武帝の長子、皇太子晃はかげで仏教を庇護し、そのため仏教教団は命脈を保つ事ができたといわれる。その晃を祭った窟が**第17窟**である。

景穆（ボク）帝といい15.6ｍの交脚弥勒菩薩像である。（写真中）

景穆（ボク）帝・晃は451年に突然、病死し、そのまた翌年に太武帝が宦官によって殺された。（452）

晃の長男だった文成帝が即位（第４代皇帝）し、亡父の遺志をついで仏教の興隆に努めた。**第16窟**の本尊・釈迦仏立像である。（写真左）

胸の前で結んだ帯が下に長く垂れている。像の下半分は破壊されているが、像の前に立って仰ぎ見ると、仏像を仰ぐというより、皇帝の前にひれ伏している感じである。

（ケイジの解説）

雲崗石窟はこの若き第四代皇帝・文成帝（13歳で即位）が和平元年（460）曇曜を召しだし当時の仏教界の最高位である沙門統に任じ、雲崗石窟の開窟をはじめた。

この事業は第6代の孝文帝まで続けられ、彼の遷都・洛陽の『龍門石窟』へと引継がれていった。

日本語ガイドの任莉英さんの説明の中からいくつか記憶にある話を思い出して書いてみたいとおもう。

● 石仏についている無数の穴の正体は？

「あれはくさびのの痕です。彫ったあと粘土で衣服を作りました。いろいろな装飾品も付　けました。粘土がすぐ落ちてしまいます。そこで、石に木でくさびを打ち込みました。粘　土がとても付き易いです。でも、長い年月がたちます。木が腐りました。粘土が剥げ落　ちてしまいました。痕に穴だけが残りました。」

● どうして立像は下の土を掘っているのですか?

「雲崗石窟、石仏、まず頭から掘り始めました。どんどん彫っていくうち脚が残りました。

土彫るしかありませんでした。これで、雲崗石窟、まず上から彫り始めたことがわかりま す。

● 本当は曇曜五窟の中心窟は第19窟です。20窟が外壁があったらここに立って眺めたら19窟が扇の要の所に位置します。今、20窟、外壁ありません。だから皆、中心と思っています。

● 曇曜五窟の胸には龍が彫ってあります。(分からなかった)、人民は石仏、拝みます。 つまり、皇帝を拝んでいます。

以上：任さん語録より。

今度の旅の二つ目の目的だった『雲崗石窟』の見学はこうして終った。

このあと、三つ目の目標点・『懸空寺』へ向かう。一度、大同にもどり昼食をとってから向かう『懸空寺』は約2時間の行程です。と任莉英さんが言った。ここに到る過程で、ぼくは明日の『五台山』観光も任莉英さんにガイドをお願いしょう。という気持ちになっていた。

足になるクルマもワーゲン・パサートのなかなかフットワークの良い乗用車である。

何よりも大同から五台山まで定期のバスは出ていない、と彼女は言う。

3000メートルの高地へ向かう天空ルートはやはり快適な乗物を選びたい。

仮に、何とか行ったとしても観光案内から宿泊と、考えると大変である。　彼女は言う。

「大石さんは一番良いのは、このまま懸空寺見学したのあと、そのまま五台山に私たちと行きます。懸空寺は大同市と五台山の中間です。あと4時間、山を登ると五台山に着きます。もう、夕方です。泊って、明日、一日、五台山、見学します。

午後、大同市に戻ります。途中、木塔、見学します。大同、夜に着きます。もう一日、ホテルに泊まって北京行く、どうですか?いちばん良い行程です。」

ぼくは同感だった。旅行社との料金交渉とホテルにあさって泊まるから旅行ケースを預かってもらう交渉などを済ますのに1時間、昼食に1時間ほど要し『懸空寺』へ向かった。

懸空寺はこちら↓

懸空寺は、北岳恒山の山中、西の翠塀峰の絶壁に張り付くように建っている。断崖の穴を開け支柱を差し込んで土台にして山腹に楼閣を建て、それぞれの楼閣は桟道でつないである。楼閣や回廊は下から見ると宙に浮いて見える。建てられたのは北魏の末期・491年にさかのぼる。

いつも中国旅行で使うメモ帳はスーパーに売っている「工作手帳」である。

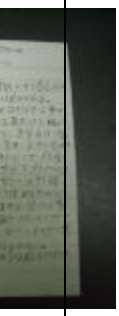
150×100の80枚、なにより使い易いのは全体が自由にくねくね(変な表現だが)していて

一度、携帯したらやめられない東西(しろもの)である。

中国に行く友人たちに「みやげはいらないからこんな手帳(安いものです)買ってきて」

と言って見せるのだけど、同じ物を買ってきてもらったことがない。

「もうそんな商品は売ってないよ」と店の子に言われたというけど、ぼくが行くとちゃんと見つけられる。(メモ好きな方は一度試されたら,いかが。一冊3元くらいかな。)



さてさて、又、クルマの中から始まります。　時刻は、９月１２日のごご４：００です

実は今、記憶をたぐっているところなのです。大同市の有名なお寺、『華厳寺』は『懸空寺』
に行く前に行ったのだったか、五台山の帰りだったのか？

まあ、メモ帳に沿って書いていくことにする。

懸空寺は一度、テレビで紹介されたとき妻が「そこにはいっぺん行ってみたいとこだよね」
と言っていた寺である。「すごいとこらしいよ、高所恐怖症には駄目みたいだよ。ぼくが行ってよく見てくるからね、動画もとってくるよ」と答えたところだ。

懸空寺に着いたのが午後3時、ちょうど1時間の見学だった。
これから五台山まで約3時間半のドライブ登山である。
任莉英さんのはなし
「大同～五台山は今の季節は定期観光バスはありません。観光客のピークはすぎてしまいました。
だから「一日ツアー」のバスはでません。朝、１回、大同から長距離バス出ます。不便です」
と言う。
ようこそ和平旅行社で2日間ツアーに組んでよかったと思った。

１日７００元だから2日だと１４００元、結構高いと思うけど時間のことを考えると仕方がない。
もし、２～３人で来ていたら一人１日４～5，０００円というところだ。
ここまでのところ、今回のぼくの旅は志に反して、専用車を使っての贅沢な旅の感を呈している。

でも、弁解するわけではないけどこれから向かう五台山は、どっちにしろ又、日本語ガイド
の世話にならなければあの膨大な数の寺院をどうやって回っていいかわからない。
仮に、持ってきた旅行本を頼るだけでは時間がいくらあっても無理なことはわかっていた。

そうそう、懸空寺のはなしを忘れていた。１時間、時計の針を戻すことにする。
じつは着きそうそう、頭の中か真っ白になる出来事が起きた。（大袈裟な表現ではない）

雲崗石窟のときから、「チョット変だな」と思っていたことだった。デジカメの具合がどうもお
かしかったのである。スイッチをいれてもレンズが出てこないのだ。

目の前に展開する、あの写真やテレビで見ていた異様な光景を眺めながらスイッチが反
応しないもどかしさ。

普通なら2,3枚撮影すると、目の前の光景にしばし見とれる時間があるのだけど、
これはどうしたことかカメラに写せないという心の動揺は、すばらしい光景を前にした感動すら無にしてしまうのだろうか。

「家に帰って家内にこのすばらしい光景を見せることが出来ないぞ。」

「この背景をバックにぼくが写っているＨＰもつくれない。それよりなにより明日からの五台山はどうしょう？？？」

たのしみ半減・・・そういうことが頭の中を交錯した。

なんべん、いじりまわしてもエクスリーム５００のスイッチは作動しない。どうしてこうなったのだろうなどと考える余裕すらなかった。再生スイッチの方は作動する。そうこうするうち時折ジーッといってレンズが出てくる時がある。

液晶画面に山の景色が映る、（パッと心がはれる。奇跡か！）でも、それは一瞬のこと、すぐレンズが引っ込むのである。そしてまた無画面にもどる。

とうとうぼくは諦めた。

と同時に懸空寺の興味も萎えてきていた。任さんの説明もカメラのことが気になってあまり集中出来ない。

第三楼ぐらいまで上り始めた頃だろうか、一瞬ある事がひらめいたのである。後で考えると諦める前にすぐ考えつく筈のことだったが

「写るんデスは売ってないだろうか?」任さんが「そうですね、売ってるかも知れませんね」

という。幸運にも、　2分ほど登ると小さな売店があった。

２４枚撮りの弁当箱のようなちゃちな簡易カメラが売っていた。天の助けとはこのことだった。きれいに写らないことは分かっていた。でも、ないよりましである。

明日からの旅はバカちょん（愛称）カメラを買い足し買い足しの旅になりそうだ。

ぼくはこのとき１つの教訓を得た。これから日本を発つときは念のために１個か２個の日本製インスタントカメラをスーツケースに入れてくることだ。こちらでカメラの修理など考えられないことだからだ。何といっても日本製は３６枚撮り、型も小さくてベストである。

懸空寺の写真はバカちょんカメラのため見ずらいと思います。

尚、五台山ではまた、もとのデジカメ画像をお楽しみください。（直ってました?）

それでは五台山へどうぞ。

五台山は、峨眉山、普陀山、九華山とともに、仏教四大名山のひとつで、文殊菩薩の道場とされてきた。山頂が平らかな5峰から形成されているため五台山といわれるが、別名を清涼山という。最高峰の北台頂は標高 3058 m,夏でも涼しいことから、こうよばれたのである。

他の三山と異なり経典に名前があるため、四大仏教聖地のなかの第一の聖地とうたわれる。雲崗石窟と同じ、北魏の時代に創建された寺院が多いが、南北朝時代には２００余、最盛期の唐代には 360 余の寺院があったといわれる。

文殊の聖地五台山は仏教者のあこがれで、インド,朝鮮、日本からも巡礼者が絶えなかった。（引用：『週間中国悠遊紀行』14 より）

・・・五つの峰の内側は台内と呼ばれている。代表的な寺は菩薩寺,顕通寺、塔院寺などでそれらの集まるところを台懐鎮寺廟群とよばれている。上の写真は最後に登った黛螺頂の頂より台内を望む。

拡大します。↓

←

ところで、たべものの話を少ししたいと思う。

山西省の料理はとても美味い。ぼく好みの味です。大同市で2回、五台山で2回、ガイドの任さんと一緒に食事をした。

ご当地の評判の店に連れて行ってもらったせいもあるのだろうが名物の刀削麺などは気に入って食事の度に食べた。

（下左はタレを麺にかける食べ方。その逆で日本のざるそば式もある。）

他にも「これは山西省の名物料理です。」とか「これは大同の特産菜です。」とか、そんな類の料理がとても多い。そして、そのすべてが真好吃(本当においしい)のである。

米飯（ミーハンという）も、内モンゴルでは粒がちい

さくポロポロしていたけど当地のそれは日本の（‥ひかり）並み?だった。

五台山名物の「粟の団子」も大同料理の「ぶたの耳」も印象に残る名物料理だった。

とくに五台山は水が良いのだそうだ。世界に名高い「北京料理」の原点は山西料理にある、といわれているのもうなずける。

大同で昼食で、いつものようにぼくがビールを飲んでいた際の会話。

「白さん（運転手）あなたは　昼は飲めないから今夜、夕食のときにでも一杯やりませんか?」と誘い、そのあと当地の酒の話になった。

『ところで山西省の酒は何ですか?」と尋ねると彼は

「山西省は黒酢が有名ですが、もっと有名なのがあります。それは汾酒です。」

とすかさず返答した。

「それは白酒ですか?」と、さらに訊くと

「そうです、汾酒はとても美味しい酒です白酒の本家といわれています」という。

「では、今夜は汾酒（フェンジウ）で乾杯しましょう。」ということになった。

左の男性が白さん（32歳）そして、右が汾（フェン）酒

いくつかの峠を越えて目的地「五台山」に着いたのはすっかり暗くなってからだった。

左手に川をみながらクルマは売店の並んだ街を通りすぎさらに10分ぐらいは走ったところに目指すホテルはあった。

クルマから外に出ると思わず身震いしそうな寒さだった。

「ここは五台山では大きい方のホテルです。」と任さんは言うけれど部屋に入ってみると,やはり市内のホテルとは違う。

3年前、家族で安徽省の黄山に行ったとき、山頂ホテル（青海飯店）に泊ったが、部屋に入った瞬間、そのときの記憶がよみがえってきた。

部屋から受ける感じがそっくりなのである。暖房は効くそうなので『フフホトの草原の包』よりはまだ、ましかなと思った。

夕食は9時を過ぎていた。ホテルの食堂ももうほとんど片付けられていたのを任さんが支配人に無理に頼んで料理を作ってもらったようだ。メイドの小姐たちもいかにも不機嫌そうだった。

そりゃそうだろう片づけが終る頃にまた客なんだから、とおもいながらイスにかけるとまだ15,6才の子供のような小姐が二人、ビニールのテーブルクロスをかけに来た。

「謝!!」（ありがとうね）というと、無理に笑ったようにみえた。

（酒でも飲んで、売上に協力してあげなきゃ、）と思い何本かのうち高そうなのを注文した。

白さんが自慢していた汾酒は確かにおいしかった。30度、40度、50度と度数があるらしい、その時飲んだのが何度だったか忘れてしまったけど口あたりのいい甘くてまろやかな味だった。

飲み干したぼくの顔を「どうでしたか?」というような顔をして白さんが見ているので

だまって、空いてる手で親指一本のVサインをつきだして見せた。

中国人がとても満足したときによくやるポーズで一度やってみたいポーズだった。

300mlほどの小瓶を白さんと空け、すっかり出来上がってしまった。

暖房のきいた部屋に戻った時は10時半頃だった。

蒲団?はうすく、クリーニングはしてあるようだがシーツは湿り気があり、かす

かにカビの匂いがした。

こんな時のために用意してきたトレーナーを着て、顔には掛フトンとの間に両面起毛のタオルをかけ眠りの態勢にはいった。でも寝心地はこうして書いているほどいやではなかった。

後で復元した写真と、　カメラが直って写した五台山のホテル

２００６年９月１３日（水）

五台山での朝、　雲ひとつない中国ではめずらしいぐらい空は青く、高かった。

朝食の時間は８時半までと言われたのでもう昨夜のうちに朝飯抜きをきめていた。

昨夜の汾酒が効いたのか８時ごろまで目は覚めなかった。

外に出て念のためにもう一度デジカメを操作してみたら、何と、液晶画面にホテルの玄関がくっきりと写っていた。今日は売店で、昨日よりはましなインスタントカメラを買おうと思っていたところだった。カメラも疲れていたのだろうか。

あとで分かったのだけど、包頭で砂スベリをしたとき、ジーンズの右ポケットにデジカメを入れていたのが原因だった（推測）。というより、ジーンズのポケットの底ににあのきめの細かい砂が入ってしまったのだろう。全身、砂だらけになったけどその後、何枚かは撮影出来た、後からレンズの出入りが変なのに気付いてはいたが。

そういえば、敦煌の鳴砂山でも買ったばかりのサイバーショットで同じ経験をしたことがあーる。そんなときに限って、いつもはしているケースを忘れている。

それにしてもこれほどうれしい出来事はなかった。（おもわずバンザイ！）

結局、妻がいちばん楽しみにしていた懸空寺でのショットだけが１枚もないのが残念。

インスタントカメラで撮った分がどれほど写っているか、これもまた楽しみでもある。

まあ、３０％ぐらいの確率でピンボケ写真にちがいない。

「わたしたちはまず菩薩頂から見学します」と任さんが言う。

実は五台山に来たもののぼくは仏教にそれほど詳しくない。その割にはなんと多くの中国の仏教寺院、道教、ラマ教、回教寺院を巡って来たことだろう。

菩薩頂は廟群（台懐鎮）の中ではいちばん高い所に位置している。顕通寺から１０８段の石段を登りきったところにある。任さんはいう

「わたしたちはクルマで石段、あがりました。下から歩いて上ると、とても急です、とても疲れます。」

菩薩頂は五台山にもっともゆかりのある文殊菩薩の居所と考えられている寺である。

しかし清の順治帝以降、ラマ教に変えられ２５あるラマ教の寺院の代表する寺院になっている。

中国四大聖山のことは先に書いた。それぞれ信仰する菩薩のことも書いたが、なかでも文殊は舎衛国のバラモンの子で仏（釈迦）がなくなった後の実在の人物と言われている。

普賢菩薩（四川省・峨眉山）とともに釈迦の脇侍菩薩でもある。「三人よれば文殊の知恵」といわれるように智をつかさどる菩薩といわれているがそれは学問ではなく参謀としての知恵とか判断力に優れていたと言われている。

昔から伝えられえている**『五台山の伝説』**というのがあるので書いてみる。

・・・・むかしむかし、五台山は五峰山とよばれていた。ここの気候は悪く、冬は水が凍り、春は嵐が吹き荒れ、夏は耐え難い暑さにみまわれる。作物は出来ず、人々は困っていた。　そこに文殊菩薩が伝教にやって来た。

文殊菩薩は助けてあげよう、そうだ、ここの気候を変えてあげようと思った。東海の竜王のところにある大石があつて、それは乾燥した空気を湿す力があるという。そこで菩薩は老いた和尚に姿を変えその石を手に入れるべく東海に向かった。

文殊菩薩は竜王に会っていきさつを語り、どうしても人々を助ける為にこの石が欲しいと願い出た。すると竜王は申しわけなさそうに

「他のものなら何なりと差上げますがあの石だけはだめです。あれは、私たちが何百年もの月日をかけて海の底から持ってきたものです。もし、あの石を渡してしまえば、竜の子たちが休む場所がなくなってしまいます。」と断った。

文殊菩薩は自分が五峰山の和尚で人々を苦しみから救うために助けを求めて来たことを繰り返した。

竜王はこれ以上正面から菩薩の願いを断り難くなってきた。そこで、この老いた和尚一人であの石を運ぶことは出来まい、と思い言った。

「あの石はとても重い、もし、あなたが人の助けなしで石をお持ちになれるなら差上げます。」と答えた。

菩薩は礼を言って石に近づいた。その石に近づき呪文を唱えると巨大な石はあっというまに小さな石ころに変わってしまった。

文殊はその石ころを懐に入れ飄然と去っていった。

帰って来た文殊菩薩がその石を谷間に置くと、急に奇跡が起った。

長年の日照りで乾き切った大地は一瞬のうちに涼しい天然の牧場に化した。

こうしてこの谷間は「清涼谷」と命名され、人々はここに寺を建て、そこを清涼寺と名づけ、五峰山も名を清涼山と変えた。いまも五台山の別名として人々に呼ばれている。

仏教の経典にでてくる【文殊菩薩像】は獅子にまたがり、右手に剣、左手に経典を持つのが一般的とされています。

経典は知恵の象徴、剣はその知恵が研ぎ澄まされている様を、獅子はその知恵の勢いが盛んであることを表現していると言われています。

髪は1つ、または五つ、六つ、八つのまげを結っています。呪文の文字数と文殊菩薩のまげの数が唱え方により一致するのだそうです。

「菩薩頂は清代には歴代皇帝の五台山参拝の時の宿所でした。」

「康熙帝が４回、乾隆帝が3回訪れています。」（左上４番目の写真が皇帝の宿所。）

１０８の石段を下りるとそこは五台山寺廟中最大規模をほこる**顕通寺**がある。

顕通寺はまた五台山の中で最初に、というより中国に仏教が伝来して最初に建てられた洛陽の【白馬寺】より少し遅れた後漢の永平年間（58～75）に建造された。

「顕通寺は五台山の青廟の代表寺院です。」

「任さん、青廟って何ですか?」

というぼくの問いかけに、任さんの説明がつづく

「和尚さんの袈裟は青（灰）色です。そして、ラマ僧の衣服　黄色です。ラマ寺院のこと

黄廟といいます。黄廟の代表寺　菩薩頂です。五台山に９９の青廟あります。」

顕通寺はさすがに広い、ある本には敷地面積８万平方ｍとあり、又別の本には４万平方ｍとある。洛陽の【白馬寺】もとてつもなく広い、巨大公園のように感じたったがここ建通寺も負けてはいない。

白馬寺のときは運転手ガイドのチャオさんを駐車場に待たせての独り見学だったので中の殿堂も飛ばしながら、ちょっと覗いては出る、といった按配だった。ここはそうはいかない。任さんにとっては一つ一つコースの説明が身についたリズムになっているのだろうから。

ときには「ここは大石さん、拝んだ方がいいです。」

といって、中国式の手のひらを目上にかざしてはひざまずく、これを3回くりかえし式礼拝をやらされる。（任さんはしない）。またあるところではラマ式のマヤ車を回させられる。

説明を受ける。中に入る。そのくりかえしで建通寺は正直、疲れてしまいました。

まだ続くのか、と思っていたら次の殿堂、たしか【無量殿】に来たとき

「あれっ、鍵がかかって中に入れません」という、そういえば周りに参拝（観光）客がいっぱい立ったり、座ったり、写真を撮ったりしている。

坊さんたちのお昼時間だそうだ。時計はたしかに正午をさしていた。

やがて横の通路を大食堂に向かうのだろう、手に椀を持った坊さんの大行列が通る場面に遭遇した。貴重な体験だった。このときも、ぼくのデジカメは撮影モードになっていた。

デジカメの解説書を見ていたらムービーの項目のところにムービーカットというのがあった。動画の1シーンを静止画にカット出来るという。さっそく試した画像が下です。

というわけで顕通寺の殿堂巡りを途中でやめて

ぼくたちはすぐ下にある【塔院寺】へと向かった。

【塔院寺】はもともとは独立した寺院ではなく、顕通寺の一部でした。と任さんはいう。

「あの白塔は五台山のシンボルです。高さは５６メートルです。正式の塔の名前は釈迦牟尼舎利塔といいます。唐の時代に日本の円仁和尚がここに来て詠った詩があります。

・・・・・・・・遠く台頂を望めば、円く高くして樹木を見ず

地に伏して遥かに礼し　覚えず涙を雨ふらす。

もともとチベット仏教式の塔ですが、下の部分は仏教式です。釈迦の他に、観世音、普賢、地蔵、文殊の四菩薩を安置しています。」

すぐ近くにある万仏閣を見終わったら1時をすこし過ぎていた。「今から昼食をたべて五台山をあとにします。途中、木塔に寄って大同に帰りましょう。」と任さんが言った。

ぼくは、実は、もう一ヶ所、どうしても行きたいところがあった。

寺の名前も、由来も関係はなかった。ただそこに上って白塔を眺めて見たかっただけである。そこから台懐鎮を写真に収めたかったのである。

任さんに言ってみた。「昼ごはんは簡単に刀削麺だけでもいいですから、あの何とか山に登ってみたいですね。リフトで上り下りすれば３０分もあれば大丈夫じゃないですか?」

「いいですよ」と任さんが言うので急いで食事をすることになった。

ところで中国人の食堂での注文の仕方だが昼夜関係なく注文する皿数が多いように思う。これは日本人のランチ、ディナーの感覚とは違うようだ。

「簡単に済ませて観光に廻りましょう」などという気持ちは日本人ならとる料理の数を少なくと思うのだが彼らの場合は急いで食べること、と解釈するように思える。

この日も次々と注文して8品は注文したかもしれない。例によって山西省特有の黒酢が小皿に入れて出る。（感想：うまかった。1時間はついやした。）

1番目はビールと黒酢、2番目は食べた食堂、3．4はすこしピンボケです。

黛螺頂はしばらく歩いたところからリフトを利用して４００ｍを上る。別にハイキングコースと階段コース（1080段）があるらしい。　ぼくたちは躊躇なくリフト３０元を選んだ。

一段が３０センチと聞いてびびってしまった。

黛螺頂　の頂にある寺には五体の文殊菩薩像があることで有名なんだそうだ。五台山の五つの峰のそれぞれの文殊を象徴しているといわれる。

時間が気になって本当のところは寺の中は記憶から消えてしまっている。

それより、帰りは楽しいことがあった。

下りもリフトで下りるつもりだったが途中で男達が声を掛けてくるなにやら

「チーマ、チーマ」と言っているようだった。横の看板で、その意味がわかった。

「騎　馬（チーマ）馬に乗らないか？」と言ってるのだ。途端にぼくの心が動いた。

「任さん、馬で降りようか？」「いや、わたしは嫌です。」と身体を引いた。

ぼくはもうそのときは決心していた。この３０度はある４００ｍの山の上から馬に乗って駆け下りる快感に酔いしれていた。しぶる任さんを無理やり説得してぼくたちは騎乗の人になった。

馬は以外に大きい馬だった。フフホトの草原で乗った馬からすると３０センチは高かったように思う。

石を踏み台にして乗った馬って「こりゃ、落ちたら大変な持ちだった。

なんてことはとても無理なこ幅１３　ぐらいの小石をイレギを馬はひずめを石の上にしっしながら下りていく、落馬よりゃないか、その方が心配になっパカ下りるなんてものではなり、土道になると、さすがに気料金はリフトより５元安いだった。

あとで白さんに聞いた話だの上からの眺めは正直言ことになるぞ。」そんな気馬上から写真でも撮るとだ。

ユラーに敷きつめた山道かり安定しているか確認馬の方が先にこけるんじてくる。

周囲を眺めながらパカかった。それでも、ときお分爽快だった。

２５元（４００円ぐらい）

が、下り終ってから近くの馬場を駆けるオプションをすると別に１００元ぐらい請求されるらしいので気をつけなければいけないそうだ。

ちょうど白さんが馬を下りるところにクルマを置いていたらしく彼はぼくが預けておいたインスタントカメラで写真を撮ってくれていた。ちょっとピンボケは仕方ないですが貴重。

五台山を充分に満喫したぼくらは、前の日に上って来た道より西側の方へ山を下った。目指すは【応県木塔】である。時計の針は２時４０分を指していた。

「造られたのは遼の時代、西暦１０５６年です。、中国では最も古い、そして最も高い木塔といわれています。　形は八角形で外見は五層だけど内側は９階建てになっています。」

任さんの案内で中に入り、上にあがってみた。まったく灯かりはなく、真っ暗で、階段は急だった。ぼくは　いつか行った信州松本城の天守閣へのぼる階段を思いだした。

「おととしまでは５階まで行けましたが昨年は４階までになりました。でも今は３階でストップです。上には上がれません。塔が傾いてきましたから危なくなりました。」

と、いく重にも板木で補修された柱を、任さんは指差しながら言った。

もうすっかり暗くなった木塔をバックに写真をとり、ぼくらは【木塔】を後にした。

時間は５時。今から大同までは１時間ぐらいかかります、と任さんが後ろを振りかえり「夕食はわたしが美味しいところに案内します」とニコリと笑って言った。

ハイウエイの両脇に白い幹に緑の葉の繁る新疆ポプラ並木がどこまでも続いていた。

二日間ぼくの足代わりを果たしてくれたパサートは暗闇のハイウェイを大同へ向けてひた走った。

今夜は大同に泊って明日は北京まで５時間の汽車の旅が待っている。

この新疆ポプラは暗くて
写せなかったのでＨＰから
拝借しました。

北京は今回の旅行では当初、通過都市ぐらいに考えていた。
出来れば王府井近くに宿をとって北京オリンピックに向けて一部取り壊されつつある胡同（フートン）めぐりをするか、故宮の城壁にでも上ってみたいと思っていた。
じつは北京はぼくの生まれ故郷で、4~5歳ごろまで育った街だった。
おぼろげではあるが当時2歳年上だった兄と石壁にのぼって遊んだ思い出がある。
子供の頃、そこが万里の長城だと信じていたが大人になって考えると、長城はとても遠すぎて遊びに行けるような場所ではないのが分かった。
そこでもしかしたら故宮の城壁だったのではないかと思ったからだ。
両親が他界するまでは自分の頭の中に、小さい頃のことや、その頃過ごした北京の街のことなどまったく関心がなかった。
それでも当時の家の中での出来事や近所の様子などはときどき家族で話すことはあったが。
かんじんの我が家が地図の上でどの辺だったかなどは聞いたことはなかった。
そもそも中国自体に関心がなく、まさか今のような状態など想像だにしなかった。
さて話を15日の朝の大同市にもどすことにする。
8時に大同駅前に着いた。
「混んでるからここで降りてくれ」、とタクシー運転手がぼくを下ろした場所はなんと白タクのいっぱいいる駐車場の前だった。フロントガラスには行き先の書いた紙が貼ってある。
「何処まで行くのか?北京なら150元でいいよ」と数人の白タクの客引きが言い寄って来た。
汽車で行っても硬寝台で103元かかる。硬座だと53元だけど硬座列車で6時間乗るのはきついナ、と思っていた。150元で、タクシーで北京市内まで4時間で行くというのは魅力だと思った。

左：北京行きの白タク3人で350元　右：ぼくの後ろにいた太原行面包車（マイクロバス）

汽車の出発は8：50分、北京駅着が3時、それからホテルまでまたタクシーだ。
一方、白タクだと昼過ぎには北京に着いてしまう。
北京での宿は昨夜のうちに任さんが勧めてくれた『台湾飯店』を予約しておいた。台湾飯店は王府井にあるので、もしかしたら故宮や胡同なら今日の内に廻れるかもしれない。
またぼくの脳は、（楽な方へ、楽な方へ）と計算が駆け巡る。
そして結局、「時は金なり」に半分以上傾きかけていた。
とそこへ又、別の客引き女が割り込んできた。
「アナタ、マイクロバス　乗らないか?一人欠員があるので90元でいいよ」
と言う。ナニ!汽車より安いじゃないか。
みるとなかなか車体も悪くない。でも、むかし寧波（ニンポー）で普陀山に行ったとき乗ったマイクロ面包車は舗装したハイウエーを走っていたにもかかわらず、がたがたがお尻を刺激して苦痛の時間を過ごしたことを思い出した。
サスペッションとタイヤを確認したらまだ新しいようだ。　所要時間もタクシーと一緒だと言う。
ということで結局、ぼくはマイクロバスに乗って北京を目指すことになったのである。
ところで大同を発つ前にひとつ気になることがあった。
それは五台山に行く前に劉氏に戴いた掛軸を部屋に忘れて来てしまったのである。
途中、気づいてホテルに電話をして捜してもらったのだが見当らないという返事だった。
夕べ遅くホテルに着いたので早速マネージャーに訊いて見たがやはり見つからなかったという。

せっかく下さった劉さんには本当に申し訳ないことをしたものだ。

さて、マイクロ（面包）車は快調に飛ばし北京近くに着いたのはまだ正午前だった。

ところがここにきて交通事情のことで任さんが言っていたことが現実になった。片側2車線（3車線だったかもしれない）のハイウエーの右車線に動かない大型トラックの列が何キロも続いているのだ。

それはもう（何処までも続く）の表現がぴったりの状態だった。

眺めると、車から外に出て数人でトランプをしている人たち、タイヤ交換をしている人もいた。

さいわいにマイクロや乗用車は左側車線を走れた（多分車線分けをしているのだろう）けどそれでも、北京の市街地まで1時間はゆうにかかった。

結局、北京市街地にマイクロが着いたのは2時は過ぎていたと思う。

めざす『台湾飯店』は地下鉄1号線王府井駅を降り、王府井の繁華街を抜け一番目の道を右に折れ、１５０ｍも歩けば左側にあった。通り名は、わかりやすく「金魚胡同」という。

もうかなり古く見えるホテルである。

三ツ星ホテルで料金は８００元ぐらいの中級ホテルであるがショッピングや市内観光にはすこぶる便利なホテルだと思う。

一階のロビー横には日本料理店『江戸川』があり。多分、日本人観光客が多いのだろう。

ほんのすぐ近くに「王府井百貨大楼」や「新東安市場」があるにもかかわらず細い路地に入ると昔の小さな店や住居があって落ちついた庶民の町、そんな感じがした。

台湾飯店の隣には『和平賓館』があり、斜め向かいにもかなり大きいホテル『王府飯店』が建っている。金魚胡同はそんな通りである。

ホテル内でする事がいっぱいあった。

愛想のよさそうな女服務員がインフォメーションコーナー（つまり交通チケットの斡旋や団体ツアーの斡旋,紹介etc・・・）に座っていた。さて、今からすることは、

○　あさって行くアモイまでの航空券の手配。

○　明日何処へ行くか相談と申込。

○　胡同にはどうすればいけるのか?の相談。etc・・などである。

まず、アモイ行きの航空券を購入しなければならない。

●北京～アモイの所要時間が2～3時間。上山さんが４時前後着なら迎えに来れるというので、それに甘えるとしたら何時に北京を発てばいいかを計算してみた。遅くとも正午より前の便になる。

余裕をみたら11時発かなと計算した。北京空港までタクシーで1時間半とみて、ホテル発を9時半。朝ご飯を食べてちょうどいいかな。

ということで服務員に航空便を調べてもらったら8時半の便の後は12：05発だという。まさかホテル発を6時半というのはないだろう。12時5分発で丁度いいだろうと、それを予約した。

●つぎに明日の現地ツアーをどこにするか?コーナーの横にあるスタンド看板に張り紙がしてあるのが目に入った。上から、八達嶺長城ツアー、司馬台長城ツアー、頤和園ツアー、市内ツアーなどが料金と共に書いてあった。

「頤和園」はいちばん行きたかったけど、妻が北京の観光地が出るテレビを見るたびに 「頤和園だけは私も行ってみたい」 と言っていたので、そこだけははずすことにした。

服務員の早い中国語での説明はまだぼくには無理が多い。

しかも彼女は、ぼくの苦手な北京語の発音で喋る。 語尾がアール化していて、話の内容が聞き取りずらいのである。

来る前にグローバルの深栖さんと司馬台長城について話したことがあった。

「八達嶺に較べるとやはり長城に来た、と言う感じがしますよね。ちょっと遠すぎますけどね。」

と深栖さんは言っていた。じゃ「司馬台長城」にしてみよう。そう思ってよくみると決行の曜日がとびとびになっている。

行かない日もあるんだ、と思いながら見るとちょうど明日が決行日になっている。

そこにきめる事にして２８０元の参加費を服務員に差し出した。

それでも彼女がなにやら例の北京語で話しかけてくる。

早口と「はひふへほ言葉」でさっぱり内容が理解しにくい。仕方なしに相手の言うことが分からないときにぼくがよく使う「明白了」（わかりました）と返答しておいた。本来なら「不明白」だが、どちらでもいいと思ったときや不利な結末にならない時などは面倒なので、つい言ってしまう。

「ホテル前に、朝８時半にバスが迎えに来ます。」というところだけはよく分かった。

３０分ほど、この『旅遊コーナー』で時間を費やし故宮を目指した。

もう４時が近かったけど和平飯店まで歩いてわずか５分で来た。そして天安門広場に１０分ほどで到着した。なるほど台湾飯店は便利な場所である。

まだまだ世界中からの観光客で天安門付近はいっぱいだった。

急いで午門をくぐると、すぐ右の方に「城壁登り口」があった。以前、ツアーで来たときは目に入らなかった。入場料が１５元?ぐらいだった。

城壁の上から周囲を眺めてみたが幼いころの記憶は甦ってこない。ここではなかったのだろう。やはり遊んだのは別な所だっのか?永遠の?である。

今の故宮は改修中の建物ばかりである。大和殿、中和殿、乾清宮などほとんどの宮殿が改修のため幕で覆われている。撮ってもしょうがないと思って撮らなかった。（一枚ぐらい載せたかったけどその時は思いつかなかった。残念）

『珍妃の井戸』を見てみたかったので乾清宮から→の案内板を頼りに右折した。

『珍妃の井戸』は以前、浅田次郎の小説で読んでいた。ここでは定説としての珍妃の話を載せておくことにする。浅田次郎の小説は定説とは違います。

時に清帝国の末期、出儒教官僚と宦官の退廃政自らの手を血に汚す事でた西太后。

世欲と権力欲に取り付かれた治。

最高独裁権力者にのし上がっ

彼女によって幼時より名ばかりの皇帝に擁立されながら ついに康有為を中心とする革新官僚とともに政治維新に立ち上がったものの あえなくも失敗、幽閉の身となった光緒帝。
光緒帝とともに維新の夢を追い捕らわれた皇帝最愛の側室・美貌の珍妃。

義和団事件を口実に牙をむいて北京に攻め入る帝国主義列強８ヶ国連合。
西太后は青衣に身をやつし、囚われの光緒帝、珍妃、側近ともども北京城脱出を決意する。
西太后の命に反抗する珍妃。“皇帝陛下は北京にとどまり洋鬼子と和議にあたられるべきでありましょう”
西太后は激怒する“即刻そこなる井戸にぶち込むが良い！”

実際に見た井戸はあまりにも小さかった。
四角いつるべの付いた日本の井戸を想像しているとビックリ仰天ものである。
ある説では（あとで造り替えた）又ある説では（身体をばらばらにして投げた）とかいわれている。西洋でも有名なのか欧米人の見学者が多い。
中を覗いて見たが一応、暗かった。

ちいさな石ころ（その辺にありそうだった）を投げ込んで見たい、ふと、そんな気がおこった。
もしかしたら実際にそんなやからがいるかもしれないと思った。
横のちいさな建物に珍妃の写真が祭ってある。（写真右）下の光はフラッシュの跡。
敷地（畳１０畳ぐらい）全体の写真は左にある。

ここはもう裏門の近くである。門を出て左に３００ｍぐらい歩くと裏門『神武門』がある。（左写真）
つぎに行く『景山公園』入口（写真左）は『神武門』と景山前街を挟んである。
景山は高さ４３ｍで頂のある「万春亭」から故宮や周辺の景色が一望できるというので絶対行って眺めて見たいと思っていた。
ところが残念至極とはこのことである。左写真の通り緑の塀で囲われ中には入れなかったのである。仕方がないのでＨＰで「景山からの眺め」で探した画像を載せる。
左写真は工事の壁と壁の間から写した「万春亭」とそこから見えるはずだった景色。（右２枚）

ここまで来たのだからついでに『景山公園』の西側に広がる有名な『北海公園』を訪ねることにした。まだ時間は５時前である。入口付近で大勢の客引きがいて胡同に行かないか、と言ってた。

あとで後悔したのだが、あのとき『北海公園』をやめて胡同めぐりをすればよかった、と。
ここが胡同めぐりの場所とは知らなかったのである。
さて、北海公園の説明をしよう。ＨＰより引用して載せる。あまり面白くないかもしれないが。

北海公園は北京の中心部に位置し、最も長い歴史をもち、最も完全な形で残る皇室庭園の１つ。千年近い歴史がある。
北海公園は、庭園の歴史のなかで芸術的な傑作だと言える。面積は 69 ヘクタール（うち水面が 39 ヘクタール）。?華島は樹木に覆われ、宮殿や仏閣が並び、亭や楼閣が交錯して趣がある。中央に聳える白塔はまさに、北海公園のシンボル的存在。湖岸をめぐる垂れ下がった柳が湖に映して美しい。
霧が立つと、島の上にある楼閣が見え隠れして、まるで仙境のようです。中国古代

の神話には、海上に三つの仙人が住む山があり、その島に不老不死の薬剤があるという言われがあります。

冬になるとここの池は氷結してしまう。小さいころ氷の上で母や兄と遊んだ記憶がよみがえる。　多分ここ北海公園の池だったのかもしれない。

今は美しいピンクの蓮の花がいっぱい（写真左）の池を眺めながら北海公園をあとにしたのだった。

北長街から南長街をぬけ天安門広場にさしかかると丁度、国旗降納の時間前なのだろう、いっぱいの見物人が集まって旗を見上げているところだった。（写真左）和平飯店の近くまで来て、西の方を見ると沈みかけた太陽が彼方にぼんやりと小さく見えた。時にはビルの間に信じがたい巨大な夕日を見るときもあれば、このように遠くに小さく見えるときもある。?.?.?.?.なぜ。

１７日の朝　８時前に食事を終えて下のフロントにおりたので近所を散歩してみることにした。

ときおり、通勤の人を見るぐらいで小道には人はいなかった。小道の間に、まだ小さい小道がある。小型車がなんとか片方だけ通れそうな路地である。

左にぬけるとあの王府井が、右には東単の大通りに挟まれた区域と思えない静かな街がそこにはあった。

やっぱり、すんなり行かないものである。迎えに来た面包車の導遊（ダオヤオ）つまりガイドさんに行き先を確認したら八達嶺ツアーだという。

『司馬台ツアー』は現在は土曜と日曜だけのツアーなんだという。昨日の服務員の説明はそうだったのか。普通なら、その程度の説明なら理解出来るのだけど「はひふへほ中国語」にやられてしまった。

「没ばん法」（しかたがない）

カラフルなマイクロバスが迎えに来た。このホテルからあと２人参加するらしい。すでに黒い外人が４人、アジア系が２人それにぼくの９人グループのようだ。陽気

な外人４名の国籍はブラジル人２人、メキシコ人２人である。メキシコ人のカップル（多分夫妻だろう）は共に、巨体である。

八達嶺に着いて「滑車」なる乗物に乗るとき断られるのじゃないかと順番待ちの間中心配していた。　マイクロバスでも二人分のイスをひとりで座っていたから。

歩く時の格好は小錦にそっくりである。一人乗りジェットコースターのような『滑車』から降り、細い階段を上がると長城の途中に出るようになっている。

わずか５０段もない、でもかなり急な石段を上り終わった彼・小錦くんはアリのようにはるか連なる人の群れを眺めていたが急に足を止めて両手をかるく広げて見せた。軽く首をかしげて言った

「オーゴッド！」

結局、彼と連れの女性はその辺で記念写真を撮りあっていたが又来た階段を降り滑車で戻って行った。

７年前に長城に来たときバスで着いた広場がはるか下に見えた。（写真下左）

上の方にリフトのような索道（スーダオ）のようなものが見える途中に砦が二ヶ所ある。せっかく来たのだから、と次の砦まででもと思い登りはじめた。

ここでの自由時間が１００分だった。降り口で待合せることになっていたけど９人（ガイド含め）のメンバーはそこには誰もいなかった。１５分ははやく来たつもりなのに誰もいないということはもう滑車で下におりてしまったのだろうか。どうすればいいのか迷う。

下りの半券は渡されているので問題ないが、そう思いながら降り口に並んだ。ガイドの携帯番号を聞いておくのだった。いつもは必ずそうすることにしているのに、と後悔していたらはるか下の方（写真上右）にホテルから一緒だったアモイから来ていた女性をみかけてホッと胸をなでおろした。

左はアモイの二人。　右はガイドさん。

ちなみに往復の滑車代金は６０元（昼飯代が込みだったかもしれない）上り下りの待ち時間が合わせて４０分はかかった。週末だったらこの倍はかかるだろう大変だな、まあ日本でもディズニーを思えば同じか。

ぼくらは昼食をたべてそのレストランも巨大な宝石の友誼商店のなかにあった。そのあと2箇所の友誼商店を廻ります、とガイドは言う。なにしろガイドの収入は自分のツアー客が友誼商店で買い物をした売上の?%だけで、他に収入はないのだそうだ。そりゃ、たくさん連れて行きたいでしょう。

次は『茶館』に行きまーす、という。このあとの観光めぐりだそうだ。前に一度行ったとこまま北京に帰りたかったけど、チは「明の十三陵」に行くんろである。出来ればこのまョット遠いかな。

お茶の友誼商店では、つくという。それぞれ個室け、欲しければ買う、というパターンである。

ぼくはガイドに「説明不らされた。

組だ。説明を受けて飲まさが買う気になったらしい。茶だと言われたようだ。一国々に合わせてその店の担当がでお茶をたててもらい説明を受う中国旅行者なら必ず経験のあ要」と言ったら、英語の組に入例の４人のブラジル、メキシコれているうちにどうも小錦さん

どうやらダイエットに効くお日?杯を一ヶ月続けたら?ｷﾛ痩せるとでも言われたのだろう。まさかと思っていたがやおらポケットから１００元札を何枚か取り出し支払った。

ふたりとも太り過ぎなので女性の方も賛成なのだろう。

「明の十三陵」を見終わると帰路に着く。そろそろ3時が過ぎていた。北京にも近づいていた。聞くとあと一ヶ所、『西蔵薬草店』に寄るんだという。その手の店には四川省で何度も行ったことがある。

ぼくはそこに着いたときガイドに言った。「気分が悪くなったのでここからタクシーで帰る」と、すると、アモイからのふたりが「あたしたちも一緒に乗せてください」「可以」とぼくは答えた。

車中、実はぼくは明日、アモイに行きます。と言ったらビックリしていた。

「アモイはとても美しい街です。」と観光地をいろいろ教えてくれた。やはり、コロンス島が一番です。それと、南普陀寺を勧めますとのことだった。

彼女は子供が天津の大学に入学が決まり、自分だけ帰りに北京の観光をして帰るんだと言っていた。

明日は１８日です。北京空港からアモイへ向かいます。

９月１６日（土）am9:05

しばらく雑談が続く、移動の度に同じようなことを書いているような気がする。

タイトルが「ぶらり旅」なので写真を見ながら一緒に旅の疑似体験をしてもらえればとそんな気持ちで書いている。

それにしても中国の航空事情はこまったものである。地方ならともかく北京空港

や上海浦東空港は世界でも有数の空港のはずである。1時間も遅れて飛び立つのが当たり前では「おいおいどうなってるの?」と言いたくもなる。まさか国際便はそんなことはないと思うが。

到着便が遅れるから出発が遅れる、ということは,定刻に出たくても飛行機が着いていないということなのか、さもなくば機内の清掃、機体の点検、整備がのんびりしているかのどちら以外に考えられない。

12時05分発のアモイ行きに乗る予定で少し早いと思ったけど9時半には,ホテルを出発。

「スムーズにいけば40分で着きます。」という服務員の言葉を信じると10時10分に空港到着の予定である。

少しぐらいの渋滞なら大丈夫、と思うような時に限って早く着いてしまう皮肉さ、10時には空港に着いてしまった。

中に入って電光掲示板の時刻表を見みるとアモイ行きは、

「なんと!!」

12:40にすでに訂正されている。35分遅れの出発ということはここで2時間半時間をつぶすことになる。

「参った、参った」

新しくなって初めての北京空港をブラブラすることにした。

まずは搭乗手続きをしてスーツケースを預け、身軽になっておみやげでも買うことにしよう。

さて、ここでちょっと余談だ、

ひとりで搭乗手続きをする時のお話をひとつ。

チケットを差し出して搭乗票（券）を受け取る時、服務員から受ける質問は大体、2つぐらいしかない。なかでも一番分かりにくいのを覚えておこう。

「靠窗的位置　或者　靠走道的位置?」　あるいは「窗戸的座位、通道的?

読み方はカオ　チュアン　ダ　ウェイズ　フジャ　（又はハィシィ）カオ　ズォダォ　ダ　ウェイズ

日本語の意味は:「席は窓側にしますか?それとも通路側にしますか?」　と訊いている。

こたえは3つある。まず、①　窓側（チュアーンフ chuang)か、②　通道（トンダォ）か

もうひとつが③　「どちらでもいいです」になる。でも、③はまだ言ったことはない。

想像だが「**ウ　ソゥ　ウェイ**」日本語訳:どちらでもいいよ。か、もしくは「**隋便**スイビェン」日本語訳:おまかせです。が頭に浮かんでくる。だけど、こういう場合に使っていいのかどうかよくわからない。

現地滞在の日本人の皆さんは良くご存知かもしれないのでぼくが知ったかぶって言うと恥をかきそうなのでやめておく。

「窓側はないけどどうしますか?」なんて聞き返しがきたらお手上げである。次のコトバは伝家の宝刀「ティンブトン」しか持ち合わせない。

もうひとつぐらい服務員が言うとすれば、荷物を預けるときに引き換え用のシール券をチケットに貼りつけながら言う

「この券を紛失しないように気をつけてください。」ぐらいである。

（読み方は-ャ　ジャン　ジー　チン　ビエ　ディゥラ）

おそらく、マニュアル化された言葉だろうから強いて返事を待っているわけではないので、そんな時には、軽くうなずいておけばいいだろう。

なまじ伝家の宝刀「ティンブトン」などいうと、ややっこしいことになりかねないので気をつけよう。

横道にそれたついでに機内サービスのときのぼくの経験談を2つ、3つ書いてみる。

飲物でいえばコーラを注文したとき、何か聞いてくることがある、それは「**氷を入れますか?**」と言ってることが多い。そのときは日本語のハイか英語のイエスでこと足りる。もっと簡単なのはここでもうなづくだけでいい。

次に食事が回ってくるが、ほとんどの場合聞いてくるのは

「鶏肉にしますか、それとも魚にしますか」　である。

このときはすかさず日本語で『**次郎**』(ji rou)といえば鶏肉ランチをくれる。

自信がないのか日本人はついロの中でもごもご言う人が多いがはっきり言うことが肝心。

断っておくが大声で言いなさいといってるのではないのでくれぐれも気をつけよう。

問題は鳥肉が嫌いな場合である。魚という中国語の発音はとても難しい。

だから、どうしても答えなければならない場合は『**次郎ブハオ**』つまり、日本語訳は「わたしは鶏肉は苦手です。」(不好ブハオとはハンユィでは嫌いの意味ですから)というしかない。

しかし、心配いらない。(不胆心ーブ　ダンシンといいます。)

英語がある。Fish　フィッシュなら日本人なら誰でも言える。中国人もだれでも知っている共通語である。

だから「次郎」も「チキン」でＯＫなのだ。でも、せっかくだから***使ってみよう中国語。***

さて、おみやげの話にもどる。

北京空港で買わなければならない礼物（みやげもの）ものがあった。

上山氏の話では、今夜、どなたか彼の学校関係の方がたと会食会が予定されているらしい。

「意見交換会でもしましょう。」という話らしい。あまり窮屈な交流会は苦手ですと、上山氏には伝えておいたが一席設けてもらうときは何か手土産を差上げるのは「中国の常識」なのだ。

また明日は上山氏の懇意にしている事業家の方が運転手付きの乗用車を提供してくれるらしい、そのクルマで一日、土楼・客家（ハッカ）の住居を見学することになっている。

タイトル下の写真を拡大してみて頂くといい。『地球の歩き方』にも、まだ紹介ページがないが今回、アモイに行く目的のひとつが『客家』見学なのだ。客家についてはあとで説明するが、そういうわけで何人かに「礼物」はかかせない。しかし、日本からの手持ちは何も無いのである。北京空港売店でしかチャンスはない。

この際だから日本の友人や家族たちにも「ちょっとしたもの」を買わなければならない、「そのちょっとしたもの」にぼくはいつも悩まされるのである。

中国もたびたび来るとみやげ店などはのぞかなくなるものだ。

間違っても「友誼商店」などでは絶対買わない。

雲南地方や新疆などに行くと、それでも、安い少数民族の手作り品がまとめ買い出来て便利だけど都会地を廻っているとそれがない。ときどき老街などに出くわすが骨董とは名ばかりで大量生産の最近物骨董品がほとんどである。

たべもの、特に海鮮ものはいちばん困る、匂いがするからである。お茶類が無難だけど、貰っても飲まない人が多い。印鑑もいちどあげればそう何個もいらないだろう。

結局、ぼくはその土地のマークが入ったＴシャツかトレーナーまたは帽子ということにしている。毎回、１～２枚はＣＤも買う。どうしても、買えなかった時は帰りにかならず寄る上海で夕方からでも『豫園』までクルマを飛ばすことにしている。

去年もそうだったが、今、北京オリンピックの公式グッズがいい。すこし高いけど品質がいいし、なにより記念品としてはレアものである。小物から衣類（Tシャツ、トレーナー、パーカー、キャップ）まで専用の売場が街中や空港に設けてある。北京空港はご当地の割には品揃えが少ない印象がした。

昨年、青島市では一軒いい専用店があり息子と婿にTシャツを買った。きのう王府井のデパートにでも行けばあったのだろうけど、みやげのことなど思いもつかなかった。

指定された搭乗口２５Ｈである。航空会社別なのか、行き先別なのかわからないが階段を降りたところにあった。現在時刻は１２：２５分である。あと、２０分でやっと乗れるか。じつはもう２０分も前からイスに座って改札を待っていた。

勿論、左右のアモイ行きのぼくと同じチケットを持ってる客に「アモイ行はここですね」、と確認していた。確認はかならず若い小姉にすることにしている。なぜなら彼女らはまず外国人には親切だからだ。というより、年配者にやさしいという方が正しいのかな。

、と横の小姉が何やら指差して立ち上がった。ぼくはすぐに感に来た。１００％間違いない、それは搭乗（中国では登机口）口の変更なのだ。２５Ｈが２５Ａに変わったのである。２５Ａはすぐ隣で助かった。なにしろ登机口変更は中国ではめずらしいことではない。

空港待合室での鉄則、それは〇行き先の同じ中国人乗客の何名かをいつもマークしておくかなければならないこと。それも複数でないと、一人だと目的がわからない場合もあるので。

いつのことだったか、同じ机票をもっている小姉が慌ててカバンを持って立ち上がりきょろきょろしながら歩き出したのでこちらも慌ててついて行ったらトイレだったことがあった。

今は小姉がいたら訊くことにしているから心配いらない。それでも、日本だと「改札口が変わりました」と言ってくれるが、こちらではだまって行動する人が多いので気をつけよう。その辺の微妙なところは気にしないこと。親切さの温度差を理解するのはむずかしい。

さて、本当に疲れるぐらいいろいろあって今**1時２０分**である。

やっと、Ｂ７６７中国国際航空機は北京空港を飛び立った。最初の出発予定時刻が０時５分だったから１時間１５分のディレィ（遅れ）ということになる。

４時にアモイに到着します。と機内アナウンスがあった。およそ２時間半のフライトということになる。

当初の予定だと2時半ごろアモイに着くので半日はアモイ観光が出来る計算でいた。あわよくばコロンス島も今日のうちに行けるかも知れない。ともくろんでいた。そんな予定が反古になったのである。やはりというべきか、中国旅行の場合、計画をつくるときに〇日は「空港＆移動」日と明記しておくべきかもしれない。

上山さんには飛び立つ前に電話をしておいた。そろそろ空港に行こうかと思っているところだったらしい事情を伝えると「かならず遅れるよ」と彼は平気で言った。

ということは彼は遅れを想定して行動しているのだろうか。

彼は電話口で

「４時なら４時半に出られればいいですけどね。本人は着いてるのに荷物が出て

こないこと、多いんです。だから、急ぐ人は絶対、預けませんよ。」と。

今、夜9時、上山さんが日本語教師をしている『新干銭外語』という日本語学校の職員室?でこの文を書いている。上山先生の授業は9時30分に終る。

写真左は学院のビル、三階にある。　中、右は院内のスナップ

時計の針を5時間、後戻りしてみる。

航行時間も、降りてからの荷物の到着も、意外なほど正確、スピーディで、4時過ぎにはキリンになった上山さんと再会した。　明日、僕らを客家に案内してくれる鄧（とう）小林運転手（20代）と二人で迎えてくれた。　（写真右は翌日の客家の前で左鄭くん。右、上山氏）

鄧（とう）くんの運転するクルマは市街地を抜けず、わざわざ?アモイ島の海岸道路「環島路」（HUAN DAO RD）を走る。

海風が車のなかを吹き抜ける。　なつかしい潮の匂いが残り香のようにぼくの体にまとわる。

広々とした4車線のハクス並木の先に、真っ青なイウエーの左右のフェニッ一ツ葉ハイウエー（宮崎）をドライブしているような錯覚を覚えながら、ぼくの『アモイ』の旅は始まった。（市街地までの時間はおおよそ30分）

アモイは正式には『厦門』と書いて中国人の間ではシャーメンと呼ばれる。

アモイと言う読みは「ミン南語」での言い方である。アモイのある福建省の略称は『ビン』である。　漢字は門構えに中に虫の字を入れる。

司馬遼太郎のシリーズ「街道をゆく」に『中国・ビンのみち』という作品があるので読んだ人も多いと思う。

中国本土とは二つの橋、海ソウ大橋と厦門大橋とで繋がれ、面積132㎢のほぼ円形をした島である。車中、上山さんが言っていた。

「アモイはどんな凶悪犯罪もこの二ヶ所を塞げば犯人は必ず捕まります」と。

3日間のぼくの宿泊は上山さんの住むマンション（20階）の9階の部屋（1DK）である。ちなみに氏は7階、家具備え付けで1泊100元少々という安さである。ほとんど3星以上のホテルと変わらない。

10畳ぐらいのリビングにはソファ,電話,冷蔵庫、テレビ、電子レンジが備わっている。

テーブルの上には茶器セットもある、もちろん電子ポット付だ。

冷蔵庫の中には水、ビール（5元）、ジュース類からインスタント食品などが近くのコンビニと同じ料金である。

大きなベランダには洗濯機も付いていて、洗面所のハブラシセット、タオル、バスタオルなどすべて毎日、新しいのと取替えに来てくれる。

もちろん、ベッドメーキングも専属の小姐たちが来てしてくれ、キッチンには入らなかったけど4畳半ぐらいの広さに近代的なオープンキッチンセット付である。

快適かつ安全なマンション団地で1日で100元チョットといえば言うことナシである。

近辺のホテルは1泊5～600元というから上山さんの住むアモイは居心地のいい中国といえる。

上山先生の今日の授業は9時30分に終るらしい。
先ほど9時に書いていると言ったが、実は今、『新干銭外語』学院の校長　**杜　峰**（du feng）さんと二人で会食して帰ったところである。

ぼくがかたくるしい晩餐会は出来たら遠慮したい、と言ったので上山氏が気を利かせてくれたらしい。謝謝！

およそ2時間近く、日本料理の店で海の幸や寿司を食べながら日中間の教育制度や学生気質その他、日中の事情などを語り合った。
杜　峰校長の夢や今後の交流の可能性についても1対1の会話ならではの内容の濃いものだった。
「今年で35歳になりました。」と杜　峰校長はいう。
7年前、28歳のとき学校を創ったのだそうだ。話が弾み青島ビールを二人で6本も飲んでしまった。よく考えてみれば今日は朝からこれといった食事をしていなかったのだ。
アモイの目抜き通り厦禾路（シャファロ）の金山大厦というビルの3階に杜　峰校長の日本語学校『新干銭外語』はある。日本人教師が7～8名いる。
日本語教師希望者の為、正式名称とアドレスを書く。

SKS『新干銭語言培訓中心』　杜　峰　校長
厦門市厦禾路 862 号金山大厦3B　電話 0592-5882208　郵 361004
E　l　mail:　skscenter@163.com
http://www.sksjp.com

学校は昼働く人のためのここ金山大厦校と、もう一ヶ所、海岸線を走る環島路」（HUAN DAO RD）に全寮制の全日制の学校がある。
ここ金山校は実践型の学校のため、自分の勤務時間、レベルに合わせて昼、夜の講座を選択する。生徒はとても熱心な成人男女で職場の関係で欠席せざるを得ない学生も多いらしいと上山先生は言ってた。休日にマンションで補習授業を希望する生徒もいるらしい。

さて、アモイの夜はトロピカルナイトである。どういう夜かというといつまでも店が開いていて人通りが絶えない。

というと大人の歓楽街を想像するかも知れないが、そういう店もあるにはあるが庶民レベルの店と普通の市民が夜おそくまで遊んでいるといった感じである。

実際、ぼくも2日間、足ツボ通いをしてマンション帰りはいつも夜中の2時ごろだった。
でも人通りも多く、食堂には結構な数の客がいた。

そんな訳で翌日の朝の出発を遅めの9時にして、永定県の洪坑村の**土楼民族文化村**（200年4月ユネスコの世界遺産への申請が受理された）を目指すことにした。

客家と書いてハッカと呼ぶけどこちら中国人はカージャという。あの奇妙な大きい丸い集合住宅を客家と言うのではなく、客家とはそこに住む人々、人種？のことをいう。あの建造物のことは土楼（ツロウ）と呼ぶのが正しい。

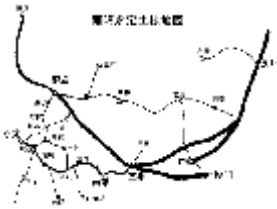
「客家」（ハッカ）はもともと黄河流域に住んでいた漢民族が戦争等を避け安住の地を求め南方に移住して来た人たちである。
移ってきた人たちは未開の丘陵地を開墾し住み着くようになった。
かれらは**既に周辺に住んでいた人たちからはよその人という意味合いを込め「客家」と呼ばれるようになった。**ちなみに客に対することば「主」だろうから土楼に住む福

建の人々だけを客家というのではないのかもしれない。

すでに１０００年の歳月を経過したということは宋の時代、当時の中国では、その土地によそから転入してきた人々のことをそう呼んだのだろう。

現在、客家の人たちは世界中に偏在している。孫文や鄧小平など有名人や経済界で活躍する華僑も客家出身者が多い。

写真は：左鄧小林君運転にクルマ。　右２枚は全体図とドライブマップです。



正直なところ、いまから行く土楼がどの辺にあるのか、本に載っている世界遺産・永定文化村を目指しているのか、それともあと2箇所ある方に行くのかよくわからなかった。

ただ、あの丸い巨大バームクーヘンを目にすればいいと思っていた。

帰ってきて小学館の週間『悠遊紀行』のグラビアをみてはじめて、訪れた土楼の数々が「客家土楼王国」とよばれている場所で、その中でも「土楼王子」とよばれる**振成楼**（写真上）、中国の1元切手に描かれている【円楼の王様】**承啓楼**など約３０の土楼が立ち並び、多くの観光客が訪れる洪坑村の土楼民族文化村を見学したということが分かった。

承啓楼

【円楼の王様】と呼ばれる承啓楼は直径７３メートル、４階建、同心円状に建物がある。

中心は祖廟があり、中に住む数百人のための婚、葬、喜、慶事の場所もある。

1階は厨房と食堂、2階は農作物の倉庫、3-4階は居室である。

一家族の居住空間は縦に連なっている。といっても一家族の家の中仁階段がある他の中国の縦家とは違い、ここでは2階以上に設けられた回廊階内の移動を、上下の移動は2～4ヶ所に設けられた階段で行うのである。

外壁は土で作られているが、内側は木組構造である。外との堺である門は三カ所のみ。

最盛期には８０戸６００人が居住していた。今は半分にも満たない。

振成楼

「土楼王子」とよばれる振成楼は１９１２年に完成した四階建て二重円楼。全体が8区画に分かれ、8カ所に階段、8カ所の井戸があり、八卦楼とも呼ばれている。

他の客家見学体験記のＨＰにもかいてあったけど洪坑村への道のりはロケーション、道路状況ともにいつまでも脳裏に残るシーンの連続といえた。

近くの林から遠くの森までどこまでも続くバ**ナナの畑**？（写真下）というのか、バナナは南の島か東南アジアのジャングルとのイメージがぼくの頭の中で覆される光景だった。

あとで分かったのであるが、もし初めから洪坑村の土楼民族文化村を訪れるのであれば別なルートあったのだという。龍岩市回りでハイウエーにのると半分ぐらいの時間で来れるという。実際帰りは来た時の半分の2時間半ぐらいでアモイに帰った。

真相は分からないがこのルートを勧めたのはクルマと運転手を提供してくれた肖国平社長だという。永定は日帰りは無理があるのでアモイに近い「南靖土楼」を勧めたらしいが、情報によるとそこは八月の台風で壊滅して

無い（倒壊）らしい。

それならということで永定へ延長したのだという。おかげで**悪路の**体験（写真上右）もしたし、行く途中に幾つかの土楼も見学することが出来たのである。

土楼民族文化村に着くと中国国営放送（北京）の文字を側面に書いた放送用（取材）バスが１０台ぐらい中から出てくるのに出くわした。

あとで聞くと大々的な土楼紹介の全国放送が1時間半番組であったらしい。

翌々日、上海に帰ったとき李黎が

「ケイジさんが出てくるかと思ってジーッと見てたけどいなかったね」と言った。

土楼民族文化村（世界遺産への申請が受理された）に入ると大きな案内看板があり、なにやら神社?寺院みたいなところがある。客家が造ったのか、それとも近年エリアのシンボルとして造ったのかさだかでない。一応、写真を下に付けておく。

ぼくたちはガイドもいなかったので何の説明も聞けないので足の向くまま土楼の中を宝探しのように巡り歩いた。

いろんな場所で客家の人達とでくわし、その都度「ニハオ!」を連発した。ほとんどがお年寄りと子供達だったがみな人なっっこく、顔を合わすと笑顔を返してくれる。ここの住人たちも世界文化遺産の一部なのだろうか。ふと、そんな気がした。

まだ慣れていないのか、他の同じような観光地のようにおみやげ店は数えるほどしかなく売り方もとても控えめで、あのうるさいほど賑やかな客への呼びかけはなかった。

しかし、すべてが共同財産といわれている客家においてはここでの儲けはそこの『・・・楼』の財産になるのだろう。

そうすると年々増えるであろう観光客からの儲けに味を占めた彼らが、これからどのように土楼の中を変えていくのだろうかと興味がわく。

1階は家畜が多く、特に豚小屋付近は臭かった。

上から全体写真を撮ろうと3階に上る。そのまま廻ろうと思ったら2軒目で壁で行き止まりになっていた。

一度、1階に下りて中道を横断して、また上がりなおしたり。上ったり、降りたりと、最初の**承啓楼**では写真とりに時間を費やした。

画像だけ別にアルバムにして設けようと思ったけどサムネイル写真を下に貼る。

土楼の中をお見せしよう。最初の画像が横向きになってしまった。

左側写真は土楼民族文化村の中を、気のむくままにスナップ撮影したものです。

今日もアモイは快晴だった。聞くところによると日本は又、台風に見舞われているらしい。こちらにきてから最初の「草原の日」以外すべて太陽の下で過ごしている。

今、夜中の1時半、行きつけの足按摩が終って夜中の街をぶらぶら歩いてマンションに帰ってきた。

近辺の食堂では、道路に出したテーブルで陽気にお喋りながら食事をしている人たちであいかわらず賑わっている。ぶらぶら歩いていると一見、風俗風の小姐たちに声をかけられたりして、アモイの夜は男達にとってもなかなか魅力タップリの街のようだ。

夜のアモイにくわしい肖社長が言っていた。

「アモイはカラオケ　とても多いです、賑やか、でも用心しないと2種類ありま

す。唄うカラオケ、唄わないカラオケ　あります。注意、注意　そして按摩所も二つあります。してもらう按摩、してあげる按摩、看板みたらすぐ分かります。どちら選ぶ、お客さんの自由（ニヤリ）」

そんなこんなでアモイの夜はなかなか更けない。

上山氏の話だと、こちらの治安は全くと言っていいほど良いのだそうだ。（保証するとは言っていなかったけど）

ちなみに今回、ぼくは上山氏紹介の〇〇足壷按摩に毎晩通った。

これを病みつきというのだろう。

夕食が終えてここに来るとだいたい11時近くになっている。

ここの按摩は指名制になっている。彼女たちは胸につけたナンバーが名前代わりになっている。案内されて部屋（といっても個室ではなくコンパートされているだけ）にはいり服務員の男性にお目当ての番号を告げると、その娘が空いている（指名がない）とやってくる。

ぼくがお願いした171番はあとの2日とも幸いに空いていた。（171さんはあまり指名がかからないのかもしれない）

おしゃべり屋で元気がよく、もちろん技術も申し分ない。171はとても気持ちの良い按摩をしてくれる。

施術時間は120分ということだがそれ以上してくれてるように思う。足按摩だから普通のイス式ソファなのだが、なぜか横に来て肩から腰、太ももと、イスを引くと背中がフラットになりベッド状態でしてくれる。

足の前にこれが30分以上は続く。二人組んでなので彼女らと4人での中国語＆日本語会話はたのしく、面白い。

フロア内にはお茶や点心（、果物もふんだんにある。）をサービスして廻る小姐たちがいてたびたび訪ねてくる。なかに一人、とてもかわいい娘がいた。

あまり可愛いので名前を訊いた。　「Ni　jiao shenme ming zi?」

ニ　ジャオ　シェンマ　ミンズ？　『何という名前なの？』

彼女は16歳だと言った。もっとも暗やみの中だからどれほど美人か、分からないけど按摩のあいだ中なんども覗くたびに何か注文して（すべて無料）あげた。そのうち、ぼくの横の小さなテーブルは載せる場所がなくなった。

帰るときにその小姑娘（グーニャン）がそっと紙きれをぼくに手渡した。

その小さな紙切れには、ちいさな三つの文字がボールペンで書いてあった。

今、エロを書きながら、もしかしたら、と思い手帳に書きとめていた名簿を繰って見たら書き写しがでてきた。　日月亭按摩所のアンマノサービス小姐名　邱連香

ほんのひとときの「ちいさな恋の物語」だった。

これだけ満足して料金は一人,65元、日本円で1，000円だから嬉しい。おまけに帰りにレジの前でサイコロを2個渡されゲームに当ると次回に、10元とか20元のサービス券がもらえる。というわけで3日通ったわけである。

按摩小姐たちは20代前半、よく訓練されていて皆、明るく小銭（チップ）は受け取らない。アモイに行く機会があったら是非行って見られたら如何だろう。ちなみのお勧め小姐のNOは

33番、95番、171番。　邱連香ちゃんの写真がないのが残念（ヘン遺憾）

愈愈明日は僕の今度の旅の最後の観光・コロンス島へ

御案内します。

プロローグで今年の旅は3つの後悔があった、と書いた。

最初のひとつはモンゴル草原の夜明けを体験することが出来なかったことである。

あの日に限って、草原にはみぞれが降ってた。

留学生の丁さんが言ってた通り「草原ツアーはやはり7～,8月がいちばん」なのだろうか。

二つめの後悔は北京の『司馬台長城』に行けなかったこと。
同じ観光地を2度訪れるほどぼくはこの大陸をまだ行き尽くしてはいない。
例えば故宮など、一度目に回りきれてないところ訪れるというのはわるくないけど、巨大観光地である**八達嶺など**、再訪の感慨は一度目に較べればはるかに劣る。
明代の姿をそのまま残していると言われる司馬台長城、
美しい湖によって東西を分けられ、橋でつながった長城に行く絶好のチャンスを逃がした悔いは大きかった。

日が悪かったのである。北京では『頤和園』にもまだ行っていない。少し足を延ばし『避暑山荘承徳』も訪ねたい地である。
そして、三つめの後悔が『コロンス島で一日のんびり過ごす』チャンスを逸したことである。

他人のせいにはしたくはないけど中国人のアドバイスは後で悔やむことが多い。ひとり旅というのはこういう時がいちばん困る。それは相談する相手がいないことだ。

今度の場合は、計画を変更するというのではなく、
「島は午後からでも充分、時間があるよ、午前中に私と石の芸術品を見に**泉州**に行きませんか?」
という肖社長の誘いに乗ってしまったことである。

「コロンス島に行くは、うちの社員、ひとりガイドにつけるよ。心配ないから」と言ってくれた。彼は自分の石工場を見せたかったのかも知れない。ぼくの方も一度、石の工場というのを見たかったし、近くにある石像をつくる現場にも興味があった。

点刻と言って写真を見ながら大理石や御影石に点（ドット）でコピーしていくアートをこの目で見たかったのである。

鹿児島市日中友好協会の海江田会長がいつも言っておられる
「私の在任中に辛亥革命の**黄興**の記念碑を南洲墓地に建てたいと思っています。」

その参考にもなるかもしれない。という気持ちもあった。
いろいろな理由から泉州行きは、むしろタイミングのよいお誘いだったのである。

実際、泉州から帰っての一日はぼくの体験のなかで要記録のマークのつく日であったことは事実である。
ただ、あとに予定していた（コロンス島見学の）時間が少なすぎたことだけである。

「遅くなってしまってゴメンナサイ。面白くなかったでしょう。」

肖社長のことばは同行した日本人バイヤーとの商談の為、ぼくに時間の無駄をさせたことに対しての言葉だったのだろう。

しかし社長からすれば、ぼくを泉州に連れてきたことの方が、むしろついでで、ぼくへの好意なのだから気にはしていない。

むしろ、世界を股に石の商売をしている上田市の柴田さんと、おそらくアモイでは有数であろう肖社長との会話はぼくにとってかなり刺激的な会話といえた。

ただし詳しい（会話の）内容をここで書くのは控えたい。

柴田さんは一年の三分の二は海外なのだそうだ。

今日もインドからアモイへ帰ったばかりで、明日は福州に向かわれるとのこと。

重いサンプル石を入れた鞄を肩にかけ旅をされているそうだ。

御影石の原石やかけらを研磨したサンプルを見てその磨かれた後の石の品質（つやとか輝きなど）を極め、取引をする。（この表現さえ正しいかどうか自信がない）

そういう会話を聞くのははじめてだった。

「これからはインドを恐れてはいけません。」

と、柴田さんは言った。

「確かに技術は中国より上です。インド人はこう言ってます。（中国製は石が悪いのではなくて研磨が違うんだ）と。中国の石はは研磨のとき熱を加えるから、その時は輝いていてもあとで輝き消えてきます。」

また、

「５分間磨くの時間を2分長く、7分にするだけで１０～２０％の艶の差がでます。女も下地を磨けば上化粧なしで綺麗でしょう。」と。

肖社長の工場はアモイから2時間足らずの泉州の近くにある。着いたのは１１時１５分だった。

工場に入ると

「ここの機具は最新の機械ですね」と柴田さんは褒めていた。

「ここが古い機械を使った工場ならこんなことはいわないんですけどね」

といいながら柴田さんは肖さんに話しかける。

「工員にしつけることです。日本人が、いくら急いで製品をつくれと、言ってきても出来ないときは断る勇気を持つべきです。」

「品質の保証は出来ません」と言うくらいの勇気が必要です。

「メインのものだけは良い石で勝負しなさい。」と柴田さんは肖氏に言う。

ちなみに石の取引単位はM3 つまり一立方メートル、ドル建てで取引するんだそうだ。

肖社長らの工場での商談がおわり、昼食を済ませ、わたしたちが石の仏像や点刻製品を作る石材店に着いたのは1時過ぎだった。

工場で頂いた名刺には《アモイ定和園芸（貿易）有限公司　＊＊＊》と書いてあっ

た。

そこは石を削る工場だからか屋根付きのオープン（駐車場のような）工場だった。

アモイまでの帰りのクルマの中では時計の針を見ることをやめた。

時の経過（今の時間）を,正確に知るのが怖い時がある。

そういう時はぼくは時計を見ないようにしている。

それは現実からの逃避に違いないが、見て、あわててしまって平常心を失うよりましだと思うからである。

たとえば、空港に間に合うか否か、で無心に高速を運転している時。

また、夏の夜釣りで、一晩中、魚を釣り続け、まだ何も釣れなくて、東の空が明るくなりかける時などである。

「もう、何時！」：「未だ、何時！！」・・と、　時は本当に心臓にわるいものである。

だから針を見るのが心臓に悪いときは、ひたすら時を忘れるようにしている。

アモイ駅の近く、賑やかな繁華街の中にあるビルの８階に肖社長の本社事務所はあった。

事務所は広くはないが中が３階になっている。

社長や柴田さんの後をついて階段をあがるとそこは会議場になっていた。５,６名の社員が柴田氏の到来をまっていたらしく、早速、一人一人と紹介の挨拶が続いていく。

それから何やらと用が足されていき、ここでも時間だけがどんどん経過していった。

光陰矢の如し、一寸の光陰、軽んずべからず。（また、ぼくのつぶやきが・・・）

やっと、肖社長がぼくの方を向いて笑顔でひとりの男を紹介した。

残念ながら肖社長がぼくの案内役につけてくれた人は期待していた可愛い小姐ではなかった。

もっとも、その席にはそれらしき人は見当たらなかったのであきらめてはいたけど。

ガイド役の若者はぼくに手をさしのべ

「わたしの名前は**偉**（人偏ナシ）と申します。」

「今年、結婚しました。」と、微笑を浮かべながら流暢な日本語で語った。

俳優の真田広之に似たアモイ大学出身の頭の良さそうな若者だった。あとで写真で見ると真田には全然似てなかった。不思議??

コロンス島の船着場に着いたのは５時だった。アモイに着いたのが４時が過ぎていたからそのままコロンス島に直行していたらと思うと残念でしかたがなかったけどそうも言えなかった。

いまから島に渡って観光をする。頭の中が錯乱状態。

この時ほど**時よ、止まれ！**と言いたかったときはなかった。

知らず知らずのうちに口のなかでつぶやきが旋律にかわっていた。

時がぼくを追い越してゆ～く。

呼び戻すことができるな～ら～。

ぼく～は何を惜しむ～だ～ろ～。

この写真は船着場に着いた写真、と船が出た頃の辺りの様子である。

ところでアモイは島そのものが市であり、コロンス島は本島から４００ｍの近距離にある小島といえる。

船で6分、船賃は7元で、2階は1元プラスされる。行きも帰りも乗船客で一杯だった。

周りを見ていると８０％が住民のようだった。１元払って上のデッキに上る人の数が2割ぐらいしかいなかったからだ。

着いた時には太陽はもうすでに西の海に沈みかけていた。

テレビで見た『日光岩』の展望台から眼下にひろがる旧租界の街並みを眺めることも、対岸のアモイ島の遠景やそして、楽しみにしていた2キロの沖合いにある台湾の金門島を眺めることも、岩の上に立つ鄭成功の彫像を見上げること。

それらすべてがフイになってしまった。

せめて「海上の楽園」といわれる島の見所だけは暗やみのなかでも見たいと思い、偉クンに無理を言って電動カート（５０元）を借りることにした。

コロンス島は１９０２年に共同租界だった。

アメリカ領事館を始め、オランダ、イギリス、日本の各領事館に列強諸国の商社や教会、学校など、それぞれの国のそれぞれの様式の建物が立ち並んでいる。

その後、中華民国の成立後には華僑が競って洋風の別荘を建て「万国建築博覧」とひとびとにいわれるようになったいろいろな様式の建物が今に残っている。

島の特徴はというとまずクルマがいない街なのだ。ここにはガソリンを使用する車は消防自動車だけで、あとは電動カートだけしかない。そうそう、何故か自転車も禁止されてるそうなのである。

ぼくの知ってる限りではこんな街は世界中でここだけである。

また、音楽の島とよばれるほど島民のピアノ保有率が高く、子供達へのピアノ教育が盛んなのだそうだ。多くの有名なピアニストが育ったという。

ぼくもカートで細い石畳の道を登ったり降ったりしてる間中、聞き耳を立てていたが、残念ながらどこからもピアノの音は聞こえてこなかった。

ところで**鄭成功**を語らずしてコロンス島を、そして、アモイを終えるわけにはいかない。

以下、フリー百科事典『ウィキペディア』より転載させてもらい鄭成功のプロフィールを紹介しよう。

鄭 成功（Zheng Chenggong:てぃ せいこう ）

日本の平戸で父鄭芝竜と日本人の母田川松の間に生まれた。幼名を福松と言い、幼い頃は平戸で過ごすが、七歳のときに父の故郷福建につれてこられる。鄭芝竜の一族はこの辺りのアモイなどの島を根拠に密貿易を行っており、政府軍や商売敵との抗争のために武力を持っていた。

父により隆武帝に引き合わされ、眉目秀麗でいかにも頼れそうな鄭森は大いに気に入られ「朕に娘がいれば娶わせるのだが残念ながらいない。

その代わりに国姓の朱を与えよう。」と言われたが、恐れ多いと国姓は使わずに鄭成功と名乗る。これ以降鄭成功は**国姓爺**（爺は老人の意味ではなく、旦那と言う程の意味）と呼ばれるようになった。

ちなみに、同時代に活躍した日本の歌舞伎・浄瑠璃劇作家である近松門左衛門の人形浄瑠璃作品である『国性爺合戦』は、鄭成功をモデルとして作られたものである。

隆武帝軍は北伐を敢行したが大失敗に終わり、隆武帝は殺され、鄭芝竜はこの軍に将来無しと見て清に降った。父が投降するのを鄭成功は泣いて止めようとしたが、鄭芝竜は意思を変えず、父と子の道は別れることになった。

その後、広西にいた万暦帝の孫である朱由榔が永暦帝を名乗り、各地を転々としながら清と戦っていたのでこれを明の正統と奉じて、抵抗運動を続ける。そのためにまずアモイ島を奇襲し、従兄弟達を殺す事で鄭一族の武力を完全に掌握した。

鄭成功は１７万５千の北伐軍を興す。

意気揚々と進発した北伐軍だが途中で暴風雨に会い、３００隻の内１００隻が沈没した。鄭成功は温州で軍を再編成し、翌年の３月２５日に再度進軍を始めた。

鄭成功軍は南京を目指し、途中の城を簡単に落としながら進むが、南京では大敗してしまった。

敗軍の鄭成功は勢力を立て直すために台湾へ向かい、ここを占拠していたオランダ人を追放し、ここを根拠とする。おそらくここを清への抵抗の拠点としたかったのだろうが、そのすぐ後に死去した。

以上『ウィキペディア』より。

後ろの席には二人の中国小姐、前にぼくらを乗せた電動カートは、右手に海岸線を、左手には丘いっぱいに広がる芝生のなかに建つ瀟洒なイギリス風の館を眺めながら、のろのろと上って行く。

まだ芝生のみどりと建物の赤い屋根の色が、かろうじて識別できる視界のなかを電動カートは走る。

あとの黄昏時がコロンス島の異国情緒を見せてくれるほんのつかのまの時間をぼくは目を凝らして眺めた。

やがて緩やかな丘をのぼる頃にはほとんど周りは闇に包まれ、足元の石畳の小道だけ１０ｍ間隔にちいさな灯かりで照らされている。

「こんなはずではなかった筈。」

ちいさなぼやきが口からもれる。

やがて海岸線に出てくると、急にライトで照らされた白い砂浜や美しい景観が浮かび上がって見えた。山中の闇がうそのような景色にぼくは、あわててカメラをだす。

せっかく憧れていたコロンス島にいながら証拠になる写真もないではここは（夢かまぼろしか?）になってしまうではないか。

シャッターを押す指にも思わず力がはいる。

ひとまわり（?）したのかさえもわからないコロンス島の**闇の観光**を終えて、見覚えのある桟橋にもどったのは午後８時２０分、もう立派な宵闇の真ん中にいた。

せっかく来たのだから、せめておみやげでも、と思いぼくらは近くの石畳の坂に連なるみやげ店を覗きながら歩いた。

坂を上ったり下がったりするうち、迷路にはまってしまい

ふたりして左だ右だ、「上に上ることはないだろう。海は下に決まっているから、」とガイドとはいっても偉くんもコロンスの闇の世界は苦手らしく、こうなると買い

物どころではなく桟橋探しに時間を費やしたのだった。

船から眺める本島のライトアップされた建物は上海浦東とまではいかないまでもすばらしい夜景だった。中国政府がすぐ近くの台湾に対して威信をかけてアモイを発展させるという意気込みを感じさせる光景にみえた。

本島にもどった偉くんとぼくはアモイ島の繁華街である中山路（歩行街）でほんものの海鮮料理を食べることにした。

いろいろな都市の「歩行街」をぶらぶら歩く（中国語でぐぁん　ぐぁん　じぇという）のはたのしい時間である。

アモイの歩行街（中国語でぶ　しん　じぇという）は華やかさでは長沙や成都には劣るようだけど海に近いせいかわれわれ日本人には懐かしさを感じる香りがする。

どこの街にでもあるケンタッキーとマクドナルドの大きな看板をながめながら、やはり多い海鮮料理店の中から1軒をえらんで中に入った。

水槽に元気よく泳いでいるアジとタイを選んで料理法を告げる。でも、塩焼きとから揚げをオーダーするのにとても手を焼いた。中国には塩焼きの習慣がない。

今度、日本に帰ったら留学生に魚の日本式料理法の中国語をぜったい学ぶべきだと痛感。

こうしてアモイの最後の夜は終るはずだったがこの夜もこりずにお気に入り日月亭按摩所の足マッサージに足が向くのである。

日月亭按摩の可愛いお茶酌み小姐・小連香ちゃんとのアモイの夜のときめきのシーンは果たして再現するか・・・。

目と目を合わせ、微笑を交わすだけのとても淡くて純？なシーンが展開するだけなのに、

でも、なぜだろう、このぼくの胸騒ぎは？

彼女は前世で会った妖怪おんなだろうか？

むかしの本を読んでいて、開いた頁に挟まれた薄黄色な押し葉に、ふいに出会ったような、忘れていた　遠い昔の自分に引き戻される懐かしさ。

記憶を喪失した中年男によりそう16歳の小連香との『シェルブールの雨傘』（仏映画）のベンチ（ベッドではありませんぞ）のシーンをアモイの夜の足マッサージ屋で思いだす。

・・・・・・と、勝手に訳の分からない理由をつけて今夜もアモイの夜は更けない。

さて、ぼくのひいきの171番は右手にトンカチを持って待っているだろうか。

そして、茶を注いで廻る小連香とのバーチャルな相(eye)恋の結末はいかに・・・・。

ぼくは五木寛之風にいえば『年甲斐のない生き方』を続けていきたいと思う。

「年をとると何でも衰えてくるね。」

そういう人に限って、何もしたがらない億劫な人間が多い。使わない脳が退化していくのは当たり前で遠い昔の錆付いた鍵のかかった記憶だけが残っている。

億劫な年寄りは、脳のシワが消え、顔のシワだけが増え続けていることを知らな

い。

むかし赤い表紙の英語の単語帳があった。『旺文社のまめたん』と言ってた。赤尾好男という人（社長?）が表紙の裏に写真入りでコメントが書いてあった。

「人間は忘れる動物である。だから忘れる以上に覚えることです。」

と,活字ではなく自筆?のペン書きで印刷されていたようにおぼえている。

ぼくは一生懸命暗記しょうと努力をしたが1頁目のアバンダン、アビリティからなかなかページを繰るところまで覚え切れなかった。けれど、このことばだけはしっかり脳に保存されている。

つまり人生にチャレンジし続ける人は体験を増すごとに脳のシワが増え続け衰えることを知らない。自然消去は老若に関係ないのだ。要は体験（英語でいえばアクション）を重ねていくことだ。

魅惑のアモイで寄り道してしまったようだ。旅にもどろう。

さて、左の写真のコロンス島の夜景後を見ていただきたい。

時間通りに書くと**今、19日朝10時**、アモイ空港のVIPルームに居る。

ピンクの制服を着た服務員にパスポートと飛机票（搭乗券）とスーツケースを預けるとあとは服務員が「席は何処がいいですか?」「窓側でおねがいします」

それだけで終りである。

昨日、肖社長が

「あした朝空港まで送りますよ。せんせいはVIPルーム使ってください。」

と、ニコニコしながらぼくに告げた。上山氏のお付き合いのお蔭だとは分かっていてもこれほど親切に世話をしていただくと恐縮してしまう。

「飛行機に乗るまでここでゆっくり寝てもいい、飲んでもいい、好きなように過ごしてください」

そういい残すと上山氏とふたりで帰って行った。

下:帰るまえに肖社長と二人で写したスナップ

10:25分

服務員と話をしたり、置いてあるパソコンを借りて久し振りに協会のHPをのぞいたりしていた。そこへ服務員がやってきた。

「あなたの乗る予定の飛行機、すこし遅れます」という

「どれくらいですか」と、いうと「わかりません」と、返事が返ってきた。

もう飛行機のデレイ（遅れ発）には驚かなくなった。

朝、上海の李黎に11時にこちらを発つから虹橋に迎えに来てと電話をした時も、大体1時間ぐらいは遅れるかもしれないよ、と伝えておいた。

やれやれと思っているところにまた、可愛い服務員がやってきて

「12：00に出発します。」

と告げる。

何とまた1時間の遅れである。きょうは心配ない。いつもだと刻々変わる情報に目は電照看板と乗客の動きに神経をとがらさなければならないけどなにせ特別室にいるのだ。

ここにはぼくを除いたら美しい制服を着た美人の服務員数名がいるだけなのだから。

退屈になったのでみやげものでも探そうと一般搭乗口のあるビルへ行ってみることにした。

なんと、遠い遠いのである。

この空港、こんなに長いのか?往復に15分ぐらいかかりそうだ。着いてみたら広い割には売店が少ない。これといったものもないのでまたVIPに引き返す。

11:35分

服務員がやって来た。

『これから飛行機へ案内します』

と笑顔が言う。

一人なのに、一般と同じ身体検査を受ける。ピーと鳴ったので、笑いながら服務員が身体を上からなぞる。ピンクの服務員がぼくのカバンを持ってくれる。出口から機まではピンク美人が歩いて先導だ。チョットいい気分である。

多分、機にはまだ誰も乗っていないと思って中にはいったら、何と、もう全乗客が座っていた。この調子だと飛行機の出発は0：00定刻通りにちがいない。明るい南海の日差しがまぶしい。

11:50分

まもなく離陸、という時、突然、ぼくの手机が鳴った。

普段なら電源を切るのに、忘れていた。仕方ないので分からないように繋いだら李黎からの電話だった。

「太太（奥さん）の十二支はナンデスカ?」と言う。

十二支が12時に聞こえた、しかも今離陸前の、掛けてはいけない状態なので慌てていた。

ぼくは出発時間の確認と早合点をして

「そうだよ、定刻通り、十二時に飛ぶようだよ。今、飛行機の中だ」

と、中国語で答えると、

「ちがうよちがうよ」

と李黎は日本語で答える。

そのあと、ようやく彼女がぼくの家内の干支を聞いていることを理解するまで下を向き、ヒソヒソ声の会話が3分は続いた。もう切ってしまおうかと何度も思った。

実をいうと、　ゆうべ、ここで土産を買おうと思っていたが、見つけに行く時間がなかったので急遽、李黎に電話して、瑪瑙の印鑑を何個か、李黎の知り合いの店に注文するよう頼んでおいたのを思い出した。

その中に家内の分も頼んでおいたら李黎が家内の分だけ干支を入れてあげようと気を利かせてくれたのだった。（不好意思！　実在対不起！！）

こうして今年のぼくの『中国ぶらり旅』はおわった。

ぼくの旅とは、一体、なんだろう?

なぜ、ひとは旅に出たがるのだろう?非日常世界との体験という人も多い。でも、見知らぬ土地で、見知らぬ人の、解からない会話の中で、その人たちとの日常生活を共有し体験するたのしさは大きい。

それを実現するためにおおきな努力はいらない。

少しの時間と、そこそこのお金と、歩けるだけの健康に、あとは、少しばかりの勇気さえあれば、少なくとも中国の**今の**旅は実現する。

ぼくの生まれるすこし前から１０年ほどの間、自分の同胞達がこの国のひとびとに行った残虐な行為のかずかずに、おなじＤＮＡをもつ一人の人間として、心の中でいつも詫びながら、ぼくの『中国ぶらり旅』は続く。

そして－

訪れた多くの寺院やすばらしい風景、歴史をかたる史跡のかずかずは映像や雑誌でまた再見する機会があると思うけど、そのとき、ぼくがふれあった多くの知人や、その時だけ、触れ合った名も聞かなかった人たちとの一期一会の出会いを忘れない為に、

この紀行文を書き続けたい。

左の人たちはこんどの旅で知合った人々。これ以外に語り合い、笑いあった旅の途中で出会った人の中で、うっかり写真を撮るのを忘れていた多くのひとがいました。

ここまでお付き合いいただき感謝！

最初のページ『２００６中国ぶらり旅』トップに戻ります